

「十勝を楽しむ「癒しの道」 ロングトレイルシンポジウム」

日時：平成19年9月6日（木）14：00～16：30

場所：帯広百年記念館 オーディトリウム（帯広市緑丘）

主催：帯広開発建設部

共催：NPO 法人コミュニティシンクタンクあうるず、  
十勝アウトドアネットワーク

後援：十勝観光連盟

参加費：無料

（司会）

皆様長らくお待たせ致しました。これより「十勝を楽しむ「癒しの道」 ロングトレイルシンポジウム」を開催させていただきます。開催にあたり、帯広開発建設部長であります安田部長よりご挨拶を頂きます。お願い致します。

#### ■ あいさつ

（安田氏）

皆様本日は「十勝を楽しむ「癒しの道」 ロングトレイルシンポジウム」にご出席頂きまして、大変ありがとうございます。開催にあたりまして、主催者として一言ご挨拶申し上げます。最初に言わなければいけないことは、日頃より私ども開発行政のご理解と推進にご協力頂きましてありがとうございます。どうしてこういうシンポジウムを私どもが開催するのかというふうに思うような方もおられるかと思いますが、若干ご紹介しますと、今年度が北海道総合開発計画の6期目になりますけれども、その最終年を迎えていまして、今はその集大成の年だということで、引き続き来年度以降、今後10年あるいは20年、その後の北海道をどうしていこうかというようなことを計画として作るための次期の総合開発計画を、今、国土審議会の北海道開発文化会というところの計画部会というところで検討しています。皆さんなかなかそういうことについては知っている方は少なく、こういう機会にお話させて頂きたいというふうに思います。総合開発計画を策定する意義というのは、国が立てる計画ということで、北海道の総合開発計画ということですので、北海道の優れた資源ですとか特性を生かしまして、わが国が直面している課題の解決に貢献する、そして同時に北海道の発展を図る、すなわち北海道をいかに開発して国へ貢献すると

共に地域の発展を図るかについてビジョンを広く国民に示す、というのが北海道開発計画の策定の目的といいますか意義であります。今日のこのシンポジウムの開催の趣旨も、いわばこの十勝において優れた資源を生かしまして我が国が直面する課題の解決に寄与しよう、貢献しよう、そして併せて十勝の地域振興のための施策について考えていこうというものでございます。近年、今日のテーマでございます「歩くこと」と言いますか、今日は「ロングトレイル」ということですが、ウォーキングだとかトレッキング、そういう「歩くこと」が大変注目されていると思います。メタボリック症候群だとかあるいはストレスの解消など、健康を維持したいとかですね、あるいは自然を楽しみたいとか、動機は様々なものがあるのですが、ウォーカーは確実に増えていっていると思います。ここ帯広でも朝早く十勝川の堤防やあるいはこの近辺の緑丘公園の周辺に行きますと、大勢の方が歩いている姿が見られます。たくさんのウォーカーであふれているということでございますが、ウォーキングブームの始まりというのはけっこう古くて、昭和39年、東京オリンピックの年に、今から43年も前になりますが、「歩け歩けの会」という、今は社団法人日本ウォーキング協会というのが出来ておりますが、その創設のもとになりました「歩け歩けの会」の発足がきっかけだそうでございます。その日本ウォーキング協会が選んだといたしますか、私どもの本省であります国土交通省の後援している「日本の歩きたくなる道500選」というのがあるんだそうですが、北海道からはそのうちわずか15が選ばれております。残念ながら十勝にはそのルートがございませんが、一方で十勝では色々な動きがございまして、例えば土幌線だとかあるいは根室本線ですね、旧線を利用したりして、その鉄道敷地跡に残っております橋梁だとかの文化財の保存と結びついたりですね、敷地跡をロングトレイルとして整備する動きなどが出ております。あるいは十勝に広がる豊かな自然環境や農村地帯を活用したロングトレイルの整備をしようということなどの動きがあります。こういうような動き、ロングトレイルの整備というのは、国民の健康づくりだとか自然体験の機会を提供する癒しの場の提供ということになると思いますし、地域にとっては都市住民がここに来て長く滞在してもらえると、言ってみれば体験型観光の振興に繋がると、しいては地域振興に繋がるものであります。私どもは先ほど申し上げました次期北海道総合開発計画の策定に際しまして、今年の春、5月から6月にかけて、全道の市町村長にインタビューして歩きました。そのインタビュー内容につきましてはホームペ

一ジをご覧になって頂きますと見る事が出来ますけれども、こういう北海道の自然を生かした地域づくりについての意見がたくさん出ております。企業誘致などが難しい現在、地元にある資源をいかにして地域の活性化を図るかという視点が重要だということですね。あるいは北海道の観光は脱皮が必要だと、もう単に自然を見せるだけではなくて体験観光への脱皮が必要だとか、様々な意見が出されておりますが、北海道の各地域では、このような活動はもうすでに色々始まっております。ちなみに北海道開発局が2001年から進めております「我が村は美しく 北海道運動」というものがございまして、これまで3回コンクールをやっております。その人の交流部門でですね、自然体験活動や森林浴、あるいは森林体験、フットパスの整備活動、あるいは農村体験などの活動というのが数十件、すでに応募というか参加しております。これらの発展が期待されているというところがございます。北海道は美しい自然がたくさんある、だからこれを資源に、と私は思っているんですね。それを一所懸命挨拶しようと思って今日は来たのですが、たまたま昨日、ツーリズムマーケティング研究所というところの市民、JTBの出資している会社の情報を聞きまして、最近の観光の傾向というのは、北海道の世界遺産も2年で終わりに近いと、なかなか北海道に来てくれる人が少なくなっているんだそうです。外国に行く人も最近少なくなってきた。身近な所で、せいぜい5万円くらいをかけて、若い人なんかは旅費を含めて、滞在・宿泊費を含めてということなんで、手軽な旅行をしたいという人が増えているんだという話を聞きました。我々は団塊の世代に視点をあてているんですが、かなり高齢化によって遠い北海道に来てくれる人が少なくなっているという話を聞きまして、ドキッとしました。これは戦略を変えなきゃいかんというふうに思いますが、その中で話が出て、リピーター率が高いのはやはり沖縄なんだそうです。沖縄はどうしてリピーター率が高いのかというところですね、あまりきれい過ぎないんだと、あるいは琉球文化だとか、体験型メニューがたくさんあるだとか、そういう琉球文化、風土、料理、そういったものが沖縄に興味をそそられるものがあるんだとか、あるいは官民をあげて誘致している、航空路線も沖縄行きは非常に安くあるんだとか、そういう事情があるようです。混沌としているとか、あまりきれい過ぎるとダメなんだというのが今の観光の傾向のようで、例えばスイスだとかカナダだとかニュージーランド、これはきれいすぎてリピーター率が大変低くなっている。一方で先ほどの沖縄ではありませんが、時間を浪費しよう、くつろごう、と、

いわゆる癒しを求める旅行客が増えているんだということなんですね。こういう点では、北海道は、可能性は十分にあるんじゃないかなというふうに思っております。話はずいぶん長くなってしまいましたが、本日は、アメリカのアパラチアン・トレイル3,500キロを踏破された加藤則芳さんを迎えて、そしてアメリカの代表的なロングトレイルを紹介して頂きます。また日本のアウトドアに関するコンセプトとして全国各地のアウトドア振興や野外体験教育を推進されている中村達氏から、この地域にロングトレイルの果たす役割について提案して頂こうということでございます。併せて地元十勝で十勝アドベンチャークラブを運営されている山田英和さんと、それから豊かな自然を活用した自然体験、あるいは観光教育プログラムを行っている林克彦さんと一緒に、パネルディスカッションに参加して頂いて、私たちに色々な情報を提供して頂きたいというふうに考えております。講師の皆さんにはお忙しい中、あるいは遠来天気の悪い中ご出席頂きまして、大変ありがとうございます。本シンポジウムを契機に、いわば観光後進地域といわれているこの十勝に、ロングトレイルあるいはアウトドア振興を通じまして、今は後ろで走っているけれどもトップランナーになる、そんなような先導的な地域になることを期待しまして、併せて北海道の次期総合開発計画に多くの方たちに関心を持って頂くことを期待しまして、挨拶と致します。どうもありがとうございます。どうぞ宜しくお願い致します。

(司会)

帯広開発建設部安田部長、ご挨拶どうもありがとうございました。

早速ですが、記念講演に入らせて頂きます。「アパラチアン・トレイル 3,500キロのスルーハイク」と致しまして、加藤様からご講演頂きたいと思えます。宜しくお願い致します。

## 1. 記念講演「アパラチアン・トレイル 3,500km のスルーハイク」

講師：加藤則芳氏（ネイチャーライター、バックパッカー）

どうも皆さんこんにちは。加藤則芳でございます。

今日は、一昨年 2005 年にアメリカの東部、東側ですね、南北にわたる非常に大きなアパラチア山脈という山脈がございまして、南はアラバマ州から北はカナダのラブラドルまで至る非常に長大な山脈なんですけれども、その中の山稜部を 3,500 キロにわたって連なる超ロングトレイルがございまして、これは世界でもっとも有名なロングトレイルと言われているものでございます。そこを十数年前から歩くことを夢見ておりまして、ようやく 2005 年にそれを実現することができました。今日はそのお話をさせていただきます。十勝ということで、私も十勝には何度も来させて頂いていますし、然別も大好きですし、かんの温泉も大好きなのでしょっちゅう泊まりに来て、菅野温泉に泊まりながら色々な所を巡ったり、十勝川の川下りをしたりもしています。それから大雪も何度も登っています。去年も登っています。「十勝平野」というイメージの中にロングトレイルを作ろうということを考えたら、山稜部に作られたロングトレイルとはちょっとイメージが違うかもしれませんけれども、ハード面プラスそれ以上にソフト面は、トレイルを作る場合非常に重要になります。その点でかなり参考になることがたくさんあると思います。それと、今日はそのアパラチアン・トレイルをベースにしまして、信越トレイルというものがございまして。新潟県と長野県との県境に関田山脈というものがございまして、そこに規模は全然小さいんですけれども、80 キロのロングトレイルを作りまして、実際にはまだ 50 キロだけオープンしています。今年残りの 30 キロを今作ってまして、来年には 80 キロ全行程オープンすることができると思うんですけれども、実はそのトレイルの理念づくりを私がさせて頂きました。そのベースになるのがまさにアパラチアン・トレイルです。スライドをご覧頂きながら話をさせて頂きたいと思います。1 時間くらい、ほぼ 1 時間ということで、本来ならばこのスライドを見て頂きながらお話するのに 1 時間半かかるんですが、それを 1 時間でしゃべらなければならないので、歩くというより走る感じになってしまうと思いますけれども、自負になってしまいましたが非常に美しいスライドですのでお楽しみ下さい。

まずこのトップでご紹介している写真は、まさにアパラチア山脈であります。

これは南部の方のノースカロライナ州辺りの風景です。ジョージア・トゥ・メインと書いてありますね、先ほど南はアラバマと言いましたけれども、アラバマのちょっと北の方にジョージア州があります。そこを出発して、北はメイン州、メイン州というのはアメリカ最北端でございます。そこまで14の州をわたっているトレイルです。3,500キロ、マイルにすると2,200マイルになります。一昨年、2005年4月8日にジョージア州のスプリングマウンテンを出発しまして、10月8日にマウント・カタディン、これはメイン州で一番高い山なんですけれども、そこまで6ヶ月、187日かけて歩き通しました。ちょっとこの地図ではわかりにくいと思いますが、下にスプリング・マウンテンがございます。ここから14の州をまたいで一番北、メイン州のマウントカタディン、マウントカタディンを西にずっと辿って行って南に下りたところにカナダのモントリオールがあります。つまりモントリオールよりもさらに北まで歩いたということです。いかに長いかということが分かると思います。

これが具体的な州ですね。ジョージアからテネシー、ノースカロライナ、ニューヨーク州、有名なハドソン川も渡ったりします。それからボストンの西の方を通して、カタディンに至るというロングトレイルでございます。

何故アパラチアン・トレイルを歩こうと思ったかという話ですが、実は私のメインフィールドは国内外のトレイル歩きをずっと若い頃からやっております。小学生の頃から山が好きで、日本の山もかなり登っております。先ほど言いましたように北海道の山もかなり登っております。日本の山登りというのは基本的にピークハンティングです。山好きな日本人はたくさんおります。山岳文化としても非常に立派な文化が日本では出来上がっておりますけれども、その日本の山岳文化というのは100%と言っていいほどピークハンティングなんですね。ところが欧米に行きますと、ピークハンティングもありますけれども、ピークを目指すだけではなくて、山麓をめぐるトレイルというのがいたるところにございます。特にアメリカでは、長さ的にはこのアパラチアン・トレイル、さらにもっと長いものも実はありまして、パシフィック・クレスト・トレイルというのがカリフォルニア州、つまり西部ですね、これはメキシコの国境からカナダの国境まで4,200キロというトレイルがございます。そういうロングトレイルがアメリカには色々あります。それを利用する人たちが非常にたくさんおります。一般的に我々日本人はハイカーというとデイパックを背負って日帰りの軽い山歩きというイメージがありますが、アメリカではアパラチア

ン・トレイル 3,500 キロを歩いた人もハイカーです。ハイキングのイメージが、英語の本国のアメリカと日本とでは全然違います。私は国内外のトレイルをずいぶん歩いてきましたけれども、その中で一番はまったトレイルと言いますか私にとって一番大きなテーマのトレイルというのが実はここに書いているジョン・ミューア・トレイルです。これはカリフォルニア州のシエラネバダという山脈の中に作られたトレイルです。日本人にとってアメリカの山脈という一番有名なのは、ほとんど 99%の方がロッキーというふうにイメージされるかもしれませんが、実はロッキーよりも高い4,000メートル級の山が連なっている山脈が、ジョン・ミューア・トレイルなんですね。実はここに私はすでに30回ほど、今年ももう行ってきました。その中に340キロのロングトレイルがあるんですけれども、これがジョン・ミューア・トレイルです。これに何故はまったかと言いますと、このジョン・ミューアという人物を私は30年来研究していきまして、「森の聖者」というジョン・ミューアのバイオグラフィ、つまり伝記を書いて、今でもぜひ読んで頂きたいんですけども、世界の「自然保護の父」「国立公園の父」「ウィルダネスの父」と言われている人です。彼が存在したから今の日本の国立公園がある、彼が存在したから世界の国立公園があるという人物です。その人物をずっと30年来研究してきました。研究する中で、彼の名前をかぶせたロングトレイルがあるということを知ってここに入りました。このトレイルは、世界で最も理想の自然保護システムを持ったトレイルです。実はこのジョン・ミューア・トレイルだけで泊数にするとテント泊を300泊しています。そこに通ううちに、実はもっと長い、すごいトレイルがあるということを知りました。それでそのアパラチアン・トレイルを資料を集めたり調べたりしていくうちにますます興味を持ち始めました。ATと書きましたのはアパラチアン・トレイルのATでございます。このATの魅力は、ジョン・ミューア・トレイルとは違うんですね。ジョン・ミューア・トレイルの魅力は100%自然です。非常に壮大な、荘厳な風景の中を、4,000メートル級の山麓をめぐる山ですけども、アパラチアン・トレイルは標高は非常に低いです。せいぜい高くても2,000メートルちょっとです。ここを3,500キロ南北に歩くことによって、自然科学的魅力だけではなくて、社会科学的魅力、文学的魅力が凝縮されているトレイルです。つまり、先ほどピークハンティングという言い方をしましたけれども、山を登るということは、やはり自然目的なんですね。私も自然が大好きですから山も登りますが、自然が大好きですからジョン・ミューア・トレ

イルにはまっています。でもそれ以外の楽しみというか歩く楽しみというのは、社会科学的な人文学的な意味合いというのがふんだんに含まれます。つまり横に歩きますと、横に長く歩けば歩くほど違った人の文化を、長ければ長いほどたくさんの違った文化を体験することが出来るんですね。歴史もまったく同じです。それからこのアパラチア山脈というのは政治的、宗教的に非常に魅力ある所です。私は実は大学で政治学を専攻してまして、今は自然のことばかりやっていますが実は専門は政治学、その中の国際政治学でアメリカの政治というものに非常に興味がありまして、このアパラチアン山麓をめぐるだけで非常に面白いデータが集まってくるんですね。つまり来年まず間違いなく、大統領は今共和党のブッシュですがけれども、ほぼ間違いなく民主党になると思いますけれども、このブッシュを支える超保守的な人たちがこのアパラチア山脈エリアに住んでいるんですね。政治的に超保守的な人というのは、今は特にそうなんですけれども、保守的な今の政治を支えている人たちというのは、超保守的な原理主義的なキリスト教徒たちですけれども、その人たちが数多くここに住んでいます。それには理由があるんですね。そういうことも私の中では非常に大きなテーマです。ただこれは山稜部を歩くだけでは学べないので、実は2005年に全行程を歩く前に5度にわたって車で山麓をめぐり、諸々取材してきました。そして来年の夏頃、できれば春過ぎにはまとめて本にして出したいと思って今ちょうどそれを書いているところです。単に山歩きの話ではなくて、一種昔のアメリカ論になる本を今書いております。それからもう一つトレイルの歴史というものがあります。これも今日はちょっと時間がないのであまり詳しくはお話しできないんですが、非常に優れた、このアパラチアン・トレイルを作った歴史があります。それから個人的な魅力、これは先ほど言いました政治的なものも含めた個人的な魅力ですね。それからメンテナンスシステム、実は今回は国土交通省の方々の努力によって今日行われているシンポジウムでございますけれども、実は環境省、昔の環境庁が全国に長距離自然歩道を作っているんです。一番最初が「東海自然歩道」、1970年。それから「九州自然歩道」。今、実は北海道にも作っています。全国に網羅しようとして作っています。東海自然歩道も実は歩きまして、ここは何冊も本が出てまして、非常に人がたくさん住んでいる所、東海道というイメージもありますので、利用している人はたくさんいるので、まだ生きたトレイルですけれども、実は2番目に言った九州自然歩道、2,700キロほどあるんですねけれども、そこは800キロほど私は歩



きました。800キロ歩いて、70%消滅していました。それはどういうことか。メンテナンスをまったくしていないんですね。作りました、はいおしまい、です。ことごとく日本の旧来のトレイルはみんなそうなんです。メンテナンスをしない。しなきゃこれだけ湿潤な国ですから、1年、2年放っておくと植物が繁茂してトレイルはなくなってしまいうんですね。それから、1970年にできた九州自然歩道ですから、1970年以降さまざまな開発がなされています。林道がたくさんできています。それから工業都市のようなものもできています。それを作った時にすべて壊していったんですね。壊してそこにサブの道を作ったりということをしなかったものですから、70%が消滅しています。にもかかわらず今の環境省の白書を見ますと、そういう優れたトレイルがあるので皆さん行きましよう、と推奨しているんですね。歩けません。ないですから。

ここのある絵もアパラチアン・トレイルを支えるボランティア組織が、アパラチアン・トレイルが林道に出た時に歩いている人たちに食べ物や飲み物を提供している、ひとつのグループの写真です。

いよいよスタートの時の写真です。スプリング・マウンテンを歩き始めた4月3日はまだ雪の世界です。国内外の山をさんざん歩いています。ジョン・ミューア・トレイルを歩いたときは35キロの荷物を背負って歩きましたけれども、この時は25キロまで絞りましたけれども、25キロですすがに3,500キロを歩くのは初めてだったので、ニヤニヤしていますけれども不安気な表情がこの中に入っています。

これはアパラチアン・トレイルを歩き始めた日の、雪がもう解け始めているんですけれども、右の木のところの白いマークがあります。これはホワイトブレイズと言うんですけれども、実は世界中でこのアパラチアン・トレイルだけなんですけれども、このホワイトブレイズを辿って歩けば3,500キロ歩けると言うシステムなんですね。日本の場合は山にはいると所々に標識はありますが、その間にビニールテープがぶらさがっていますよね。日本はどこでもそうなんですけれども、私はアパラチアン・トレイルを歩いて、これも悪くないなど。ただ昔はペンキで塗っていたので、木に対してあまりいい影響がない、その部分の木が枯れてきちゃったりしたらしいんですけれども、今は塗料を含んでいないものでやっています。これは非常にわかりやすいマークです。所々にダブルブレイズというものがあるんですけれども、これは分かれ道、これだけ長いといろいろな支線が入ってきたり分かれたりしますね。それから林道に出たり、

南北 3,500 キロですから、東西にわたる林道も含めたインターセプトハイウェイも含めたりするともう無数の道と交差していきますから、所々にダブルブレイズがあって気を付けましようということです。

私は基本的にテントで、187 日のうちの 184 日はテントで寝ましたけれども、実はだいたい 1 行程に 1 つこういうシェルターがあるんですよね。シェルターに泊まりながら歩くこともできるんです。そういう人はテントを持たなくても歩けます。これはグレイト・スモーキー・マウンテン国立公園の中にあるシェルターで、非常に熊が多いので、実はアパラチアン・トレイル全体を通じて熊が非常に多いです。私も何度も会っています。ジョン・ミューア・トレイルも含めると、アメリカで 40 回以上熊に会っています。2 メートル手前でかち合った時もあるんですけれども、ここの国立公園の中だけは特に熊が多いので、檻になっています。私はこの時は熊に会わなかったですけれども、これの 3 年前に行った時に、普通はテントなんですけれども、このシェルターに泊まってみようと思って泊まったら、外に熊が来ていました。人間が檻の中にいるという状態です。

それから同じ国立公園で、これはワイヤーで作ってあるんですけれども、においのするもの、食べ物、歯磨き粉、女性は化粧品も含めてすべてこうやってぶらさげる。これはここの国立公園に限らず、アメリカの山はすべてそれが義務づけられています。特に国立公園だとか森林局エリアは非常に厳しい。これをやらないと命取りになる。アメリカ人は全員そう思っています。日本でテント生活をする人は、こういうことをする人が誰もいないんですね。ヒグマがいる北海道ですら、ほとんどやっている人はいない。この話をアメリカ人にするとみんな目をひんむいてびっくりします。やられないのと。向こうの熊というのは、人間がいるとそこには食料がある、人間が目的ではなくて食料目的でテントを襲うんですね。ですからこういうことをやります。本州の方ではブラックベアー、ツキノワグマがどンドン里に下りてきているという現象がありますけれども、ゆくゆくは北海道にもヒグマが下りてくる、本州のように下りてくると非常に大変なことになりますね。歩く人はやはりこれぐらいのことは日本でもやるべきじゃないかといつも思っております。

これが一般的な国立公園以外の所にあるシェルターです。簡単なものですね。三面張り床に雑魚寝して、寝袋に寝るというかたちになっております。そういうシェルターの脇には必ずこういうトイレがあります。英語で野外トイレの

ことをフレイビーというんですけれども、これが必ずあります。これはバイオトイレです、バイオトイレといっても簡単なもので、おがくずが置いてあって入れて、という簡単なものなんです、素晴らしいのは、しょっちゅうこれをメンテナンスをする、トイレの掃除をする人たちがシステム化されております。これが私の歩いている間の常々の生活です。後ろの方にやはり国立公園以外はこのように木の枝に食べ物をぶら下げるんですね。

これはまたグレイトスモーキーの中ですけれども、5月に入る直前くらい、4月の末くらいだったと思いますけれども、日本では考えられないんです、この壮大な日本の中で最も大陸的な風景と言われている北海道ですらこれほどの規模はないんです。実はこの花畑は50キロにわたっている、50キロ歩く間全部この花畑なんです。どういう花かと言うと、こんなに美しい花、さらにクローズアップしますとこんなに美しい花畑を50キロにわたって楽しみました。スプリングビューティーという名前なんですね。今日は時間がないので花の写真はこの花の写真だけなんですけれども、実はクローズアップ写真、こういう写真だけで300枚撮ってきました。ものすごく美しい花がたくさん咲いています。日本にも同じようにある花、エンレイソウなんかもたくさんありましたし。

それからそれだけの距離を歩きますとこういうこともあります。冬山の装備は持っていませんので、これは3日間降り続けたんですけれども、雪の中を歩くと命取りになるので、3日間停滞しました。

それから先ほど日本の気候は湿潤だという話をしましたけれども、特にアパラチアの南部の方は日本とほとんど変わらないんじゃないかというような気候です。まさに日本の梅雨の中を歩いているのではないかと。この時は1週間降り続いて、1週間こんな感じの中を歩き続けました。植生も日本とほとんど変わらない、もちろんメイプルだとかオークの木だとか日本にはないものもありますが、それ以外の木はブナを含めて日本と同じような木がたくさんあります。草花もたくさんあります。ですから歩いているとなんだか日本の奥秩父を歩いているんじゃないか、南アルプスを歩いているんじゃないかと自分でも錯覚してしまうほど似ているところです。

アパラチアン・トレイルには色々な魅力があるんですけれども、その中のひとつなんですけれども、ここにラージサイズのピザがありますけれども、実はこのシェルター、歩いて500メートルのところにバージニア州の州道がありまして、その州道に面して森林局のビジターセンターがあるんですね。ビジター

センターの脇に公衆電話があるんです。ここまでスプリングーから歩き始めて  
だいたい距離にすると 200 キロくらいです。200 キロを歩いたところに公衆電話  
があるんですね。そこで近くの町のピザハウスに電話をしたらシェルターまで  
ピザを届けてくれるんです。これは、アパラチアンを歩くハイカーにとっては  
最も楽しみなことのひとつなんです。これもサポートシステムですよ。周り  
の地元の人たちが非常にサポートしてくれる。ここにリッジランナーと書いて  
あります。これはアパラチアン・トレイル 3,500 キロの中に実は 31 のメンテナ  
ンス団体がありまして、その 31 のメンテナンス団体が、3,500 キロ全行程にわ  
たって毎年メンテナンスをしています。自分の担当するエリアをメンテナンス  
しています。それを統括するアパラチアン・トレイル・カンサバンシー、アパ  
ラチアン・トレイル委員会という組織があるんですね。非常にシステムティッ  
クな組織ができています。それぞれのメンテナンス組織の中のリッジランナー  
というのは歩いてパトロールする人たちですね。これは全部ボランティアです。  
それからメンテナンス。これはバージニア州のメンテナンス団体がメンテナ  
ンスをしているところなんですけれども、何をしているかという、アパラチア  
ン・トレイルというのは非常に人気のあるところで、アメリカ中のハイカーが、  
アメリカではハイカーもしくはバックパッカーという言い方もしますけれども、  
目指して集まってきます。年間 3,500 人ほどがアパラチアン・トレイルを歩こう  
として集まっています。セクションを歩く人を含めるともっともっとなんです  
が、ほとんどの人はセクションなんですけれども、スルーハイクをしようとする  
人が 3,500 人も毎年います。実は 10 分の 1 以下しか全行程を歩くことはでき  
ないんですけれども、10 分の 1 といっても 300 人台、400 人台がこれだけの距  
離を歩いてしまうんですね。それだけ魅力のあるところなんですけれども、そ  
れだけ人が入ってきますと色々問題が起こります。トレイルの環境が壊されたり  
します。それを毎年そのメンテナンス団体が調査をして、これはオーバーユ  
ースだなという所を、これはまさにそれをしているところなんです、ここは  
閉鎖して、リ・トレイルといいますけれども、別の所にトレイルを作っている  
作業です。それからトレイル・エンジェルという、これはアパラチアン・トレ  
イル用語です。アパラチアン・トレイルというのは私に言わせるともう一つの  
文化、アパラチアン・トレイル文化というものがあると思っていますんですけれ  
ども、アパラチアン用語というものがたくさんありまして、その中のひとつが  
トレイル・エンジェルです。歩く人たちを支える人たちのことを、歩く人が、

トレイル・エンジェルと言います。それから、歩く人たちを支える人たちが自分たちのことをトレイル・マジックと言います。これはそのひとつですけれども、地元の人が林道あるいは、インターセプトは無理ですけれども、道と交差するところのちょっと奥の方にこういうクーラーを置いておいてくれるんです。これは無料で全部地元の人たちが提供してくれるんですけれども、特にロングトレイルを歩く人は喉が渴いて、私はソーダはあまり飲んだことがないし好きじゃないんですけれども、こうやってあると3本でも4本でも飲めてしまうくらい喉が渴いているんですね。ところが向こうの連中はソーダが好きですから、もっと飲めるんですけれども、私は素晴らしいなと思ったのは、みんな1本しか飲まないんです。別にそういうルールがあるわけではないんですが、1本しか飲まない。私も当然のこととして1本しか飲まない。何故か。たくさんのハイカーが歩いていて、仲間ができていくんですね。心のシェア、心の分かち合いができてくるんです。後ろから来るハイカーのことを思って、3本4本飲みたいのに1本しか飲まない。素晴らしい心の通い合いがあるトレイルです。それも含めて私はこのトレイルをソーシャル・トレイルという言い方をしています。ネイチャートレイルなんですけれども、ソーシャル・トレイルと言ってもいいなというほど、ハイカー同士、地元の人たち、それから地元だけじゃなくて全国から集まってくるボランティアの人たちがいるんですね、そういう人たちとの心の通い合いがあるんです。

これもその一つです。これは地元の村の人たちがトレイル上に貼っておいてくれたんですけれども、「ベッドで寝たければ下りたところをちょっと行くと、ジェネラルストアがあって、そこに公衆電話があるから、ここに電話をかけてくれれば迎えに行きますよ。ベッドと食事を提供しますよ。」というものです。地元の人たちがまったくボランティア精神で歩く人を泊めてあげたりするという。

それからこれもそうですけれども、毎日毎日1キロでも軽くしたいですから、フリーズドライとお湯を沸かすためのコンロを持って行きますけれども、ガソリンが必要になりますから、こういうものも無料で提供してくれます。

それからバージニア州で林道に下りたときにお年寄りが二人待っていました。そして下の村に行かないか、とピックアップトラックで運んでくれました。この教会の地下に連れて行ってもらいました。朝歩き始めてすぐの8時半頃だったんですけれども、地元のおばあさんたちがアパラチアンハイカーをこうや

って招待して朝食を提供してくれています。食べ終わったらまたそこまでピックアップトラックで帰してくれる。そこでまた待っていて次のハイカーを連れて行く。こういうシステムが出来上がっております。3,500 キロ、187 日分食料を全部持って歩くことは当然ありえないので、食料補給をする必要があります。こういう舗装道路を含めて、道に来るたびにヒッチハイクをしてふもとの町に下り、そこで食料を補給してまた戻ってくる。食料補給だけではなくて、自分で死にたくなるほど臭くなるんですね、やっぱり。日本と同じで湿潤なところですから汗をたくさんかきますから。下りた時に安いホテルですけれども泊まってお風呂に入ってシャワーを浴びて、それからコインランドリーで洗濯をして、翌日戻って歩く、その繰り返しです。基本的にアメリカは今ヒッチハイクは禁止になっています。日本よりはるかに危険ですから、カリフォルニアなんかは今禁止になっていますけれども、地元の人たちは乗せてくれます。アパラチアンハイカーというだけで乗せてくれるんですね。最高 1 時間くらい待ったこともあるんですけども、1 台目で止まってくれることもあるし 5 台目で止まってくれることもあるし、ヒッチハイクで困ったことはほとんどありません。これがピックアップトラックならいいんですけども、乗用車に乗せてくれることもあるんですね。さっき言いました、自分でも死にたくなるほど臭い人間を乗せてくれるということ自体私にとって信じられないんですが、「臭いけどいいかい？」と聞くと「そんなことわかっているから乗っていいよ」と言ってくれるんですね。

それから、ホステルがあります。これはアパラチアンハイカーたちを泊めるホステルが小さな町にいくつかあります。だいたい歩く人たちはお年寄りから若者まで、日本の場合は歩く人というのは圧倒的にお年寄りが多いですけども、アメリカでは若者がたくさん歩いております。だいたい若者はみんなお金がありません。私もバックパッカーと自称していますが、バックパッカーは貧乏旅行が楽しい。貧乏旅行こそがバックパッキングの旅の楽しさだと思っていますので、できるだけ安く泊まりたいという人たちに 2 食提供して 20 ドルくらいで泊まれます。とても小さな小屋のようなところもあります。5 ドルくらいで泊まれます。それからコネチカット州では、2 食付きで無料で泊まれるところもあります。そのオーナーはガソリンスタンドの社長なんですね。そこで俺は稼いでいるんだから、アパラチアンハイカーから金を取ることはないよ、と言って無料で 2 食提供している。冷蔵庫の中にビールも含めて飲み物がふん

だんに入っていて、アイスクリームまで入っていて、自由に食べたり飲んだりできるんです。

それから郵便局です。私は日本から行きましたから、下りたときに食料をその都度調達するのは時間もかかりますし、それから実は今回仕事を書きながら歩いていまして、パソコンを持って歩いていまして、みんなにバカだと言われて自分でもバカだと思ってしまうんですけども、なぜパソコンを持って歩いているかというと、町に下りてホテルに泊まってそこで文章を書いて、インターネット上にメディアに発信する、それをずっとやっていたんですね。戻ってから連載したら、自分自身もリアリティを感じない、歩いたときの熱さをそのまま出したいということで、自分のブログを含めて B-PAL のインターネット版に配信していたんですね。そういうことをしなきゃいけないこともあって、30カ所の町の郵便局に食料は全部届けておきました。町に下りたら郵便局に行って、この郵便局も実はサポートしてくれているんです。普通は1ヶ月しか預かってくれないんですが、そこにこの小包に AT ハイカーと書いておけば1年預かってくれるんです。

これもさっき言いました、コインランドリーで洗濯をします。

それから文化的な魅力という話をしましたけれども、たまたまテネシー州のアーウィンという町に下りた時に、フェスティバルをやっていたんですけども、ご存じの方がおられるかもしれませんが、ブルグラスというジャンルが日本にも入ってきていますが、カントリーミュージックに近いものですが、ブルグラスというミュージックジャンルがあるんですけども、それのもとをたどるとアパラチアン・ミュージックと言われているジャンルなんです。それからマウンテン・ミュージックとも言われていますけれども、ここが根源で今ブルグラスというジャンルができていますけれども、ここでは小さな町で1ヶ月に1度とか、町によっては1週間に1度ずつこうやってコンサートをやっているんですね。この音楽ひとつとっても文化的にもものすごく面白いものがあるんですね。例えば定住している人たちというのはほとんどがヨーロッパから来た人たちです。最初はスコットランド、イングランド、アイルランドでしたけれども、今はヨーロッパ各国から移民がたくさん入って、そういう人たちが定住しているんですけども、実は例えばアイルランドで消えてしまったメロディ、消えてしまったリズムがこの山の中に残っている。そういうものがたくさんあるんですね。アメリカの音楽研究家がこの山の中で今

たくさん音楽を研究しています。そういう魅力が文化的側面としてのひとつが音楽というものがあります。それから、それだけの長い距離を歩きますと山の中の小さな村自体を通過するところもあるんですね。ここはダマスカスというバージニア州の小さな町なんですけれども、年に1度トレイル・フェスティバルを行います。これはアパラチアン・トレイルを歩くハイカーのためのフェスティバルです。これも歩く人にとっては非常に楽しみです。それからコリドー、日本語に訳すと回廊というんですけれども、これは私営の牧場です。非常に低い山脈ですので、場所によっては、基本的には森の中を歩きます。ことごとく山頂を越える脊梁なんですけれども、ここが低くなってくるとそこが開発されて、牧場になっているところもたくさんあるんですね。牧場に出ると歩く人たちは風景展開が広がりますので、非常に嬉しくなるんですけれども、この右にあるのがアパラチアン・トレイルなんです。これはどういうことかと言いますと、私営の牧場なんですけれども、このトレイルだけはパブリックなんです。つまり、この場合は森林局なんですけれども、森林局がアパラチアン・トレイルを買い上げているんです。あるいは場所によっては契約してその部分を借りるという場合もあるんですけれども、国立公園局か森林局がアパラチアン・トレイルの私営の場所のその部分を買上げたりするんですね。そういう部分をコリドーといいます。わかりやすいのは、パナマ運河もそうです。パナマ運河は、あそこを通るだけで、本来ならば国の中を通るとその国のビザが必要なんですけれども、いちいち通るだけでそんなものはいらないということで、ある意味その運河は治外法権になっている。それと同じようなイメージでここだけは治外法権になっているということで、コリドーという言い方をしています。

先ほどグレイト・スモーキーの国立公園の話をしましたけれども、もう一つシェナンドア・ナショナルパーク、バージニア州に入ると国立公園の中を通ります。ここは夏になりますとこういう風景です。風景が展開して非常に美しいところで岩場に出てちょっとカッコつけて本を読んでいる、これはセルフポートレイトですから、カッコつけてるだけのことなんですけれども。

それからホーム・スクールとありますけれども、色々な人に会いました。歩きながら本当に色々な人と会話をしまして、色々な人たちの背景を知りました。それぞれの歩く人たち、100人いれば100人のバックグラウンド、ドラマがあるんですね。それ自体も非常に大きな楽しみのひとつなんですけれども、彼らは、お母さんがいるんですけれども、お母さんはいつも遅れて来るので間に合わな



かったので彼ら 2 人だけ写真を撮ったんですけれども、家族でアパラチアン・トレイル全行程を歩いているんです。それで、彼は 10 歳なんですけれども、子供の教育は、学校はどうするんだ、というと、ホームスクール、アメリカはそういうシステムがあるんです。学校に通わなくても家で教えることができるんですね。3,500 キロ、先ほどソーシャル・トレイルという言い方をしました。それから南北戦争の戦跡地がいたるところにあるんです。そういうことも含めて、ここを 3,500 キロ半年かけて歩く間に、ものすごく大きな教育ができるんですね。自然性だけじゃなく社会性も身につけることができる。それからこういう遺跡が山麓にあるとトレイルを外れてこの遺跡に子供を連れて行ったりしながら歩いているんです。彼らはあとから聞くと全行程踏破したそうです。

同じです。これは、ニューハンプシャーから来ている 5 人家族です。8 歳、10 歳、12 歳。彼らもホームスクールで親が子供に教育をしながらアパラチアン・トレイルを歩き、彼らも全行程成功したそうです。

ハーフ・ウェイ・オブ・マインド、心のハーフウェイという書き方をしていますけれども、ハーバズフェリーという歴史的に非常に有名な町なんですけれども、南北戦争の発端の町です。それとともに、先ほどの 31 のメンテナンス団体を統轄している組織があると言いましたけれども、アパラチアン・トレイル委員会というものが実はこの町の中にあります。この町に入った時にこの本部に行って登録をするというのが、歩く人にとって一つのポイントになるんですね。ですからここをまず目指していく。実は距離的にハーフよりちょっと短いんですけれども、そういう意味で、心のハーフウェイといういいかたをしています。この町の中にトレイルが出来て、これはもう 1700 年代に作られた階段、石段ですけれども、ここ自体がアパラチアン・トレイルになっています。右下にあるんですが、ここは南北戦争の発端となったジョン・ブラウンという人がここで蜂起をしたんですね。奴隷を解放しようとして。20 人が蜂起したんですけれども、すぐに 10 日後に捕まって全員絞首刑になったところなんですね。まさにこのところなんですね。これが ATC、アパラチアン・トレイル・カンサバンシーの本部です。ザックがいくつか置いてあるんですけれども、みんな中に入って登録したり情報を集めたりしています。

それからハドソン・リバー。これだけの距離を歩きますと、有名な川だとか、有名な記念碑だとかの側を通ったりします。ハドソン川のところを渡ります。これは国道なんですね。US ハイウェイなんですけれども、その脇に側道ができ

ていまして、これはアパラチアン・ハイカーのための側道なんです。

それからこれは北部に入ってきました、ニューハンプシャーにハノーバーという町があります。この町の中もアパラチアン・トレイルが通っています。実はこのハノーバーにはダートマスユニバーシティーという有名な大学があるんですけども、アイビースクールをご存じかと思えますけれども、アメリカには8つのプライベートスクール、ハーバードやエールも含めた超・超・超エリートな大学なんですけれども、その中のひとつがダートマスです。これはものすごく田舎なんですけれども、私は実は子供の頃から、ワイルド&インテリジェントというのを目標にしていまして、非常にインテリジェントなのに、非常にワイルドな田舎の中にある小さな大学で、こんなところに入ればいいなと思っていた大学だったんですね。その町を通っているということは、アパラチアン・トレイルを調べていくうちに知って、非常に感動しました。右上にDOCと書いてあります。ダートマス・アーティング・クラブと書いて、実は31のメンテナンス団体のひとつに大学も含まれているんです。もっと南のバージニアの方に、実は2ヶ月前でしたか、韓国人による乱射事件がありましたよね。バージニアテック、バージニア工科大学、あそこも31のメンテナンス団体の実はひとつで、私は取材であそこを何度も訪れているので、あの事件は私にとって非常にショックな事件でしたね。

それからこれは、やっぱりニューハンプシャーなんですけれども、ホワイトマウンテンズという、3,500キロのうちの実は3,000キロまでは森林帯歩きです。先ほど言いましたように、牧場の中を歩いたりして風景が展開するところもありますけれども、基本的には森林の中を歩くんですけれども、3,500キロのうちの3,000キロを超えて初めてハイアルパインとなります。ここに入った時にガラッと世界が変わる、ですからここもまた歩く人にとって大きな目標になっていて、入ったときに涙を流す人がいるくらい感動的です。

ここはマウント・ワシントンという山で、すべてのアメリカを含めて最も古いリゾート地です。これは19世紀にできたコグウェイという登山電車なんですけれども、そこの脇を通るトレイルです。

それから、もうメイン州に入りました、ファイナルステージ。メイン州に入った時、13の州を歩いて14の州に入った時に、まあそれぞれの州ごとに州に入ったよというマークがあるんですけども、私がそのちょうど到達した時に3人のハイカーがいたんですけども、そこでみんながハグして、女の子なん

かも涙を流したりなんかしていましたけれども、ここに入るとけっこうきついんですね。ほんのひとつなんですけれども、もうロッククライミングに近いような状況です。長い間トレイルを歩いていますと、たいがいみんなこういうウォーキング用のストックを持っていますけれども、本当にストックが邪魔になってしまうくらい、ロッククライミング状態のところがたくさんあります。

これは典型的なメイン州の風景です。山の方に上がると、これは岩を登っていますけれども、花崗岩でつくられています。花崗岩の上に土が積もってそこに森ができます。針葉樹の森です。主にツガ、日本にもコメツガってありますね。英語でヘムロックというんですけれども、ツガとか、いわゆる針葉樹、それからモミの木だとかスプルース、そういう類の森です。それから奥の方にあります湖が見えていますけれども、下の方は湿地帯になります。ですから、山を登るとそういうところ、歩くと湿地帯、その連続です。メイン州だけでも350キロの距離があります。一昨年ですからみなさん憶えている方もいらっしゃると思いますけれども、ハリケーン・カトリーナというのがニューオーリンズを破壊しました。実は歩いている時にあのハリケーン・カトリーナに私も遭遇しました。ただ北の方で遭っていますので、あれほどの勢いはなかったんですが、増水して危険な状態の川もたくさんありました。

北の方に行くと、本当に北の方はもう北極圏に近いですから、そういう風景ですね。トレイル自体花崗岩なんですけれども、トレイル以外のところにもこうやって土がかぶさって、苔が繁茂して、木が生えて、とても美しい風景です。下の方を歩くと湖沿いを歩くという感じになります。

これも実は驚きです。日本にも尾瀬なんかも含めて大雪山もそうですけれども、湿地帯には木道がたくさんできています。でも桁が全然違います。メイン州だけではないんですけれども、南の方にも所々木道があるんですけれども、実は木道歩きだけで200キロあります。

もう最終地点に近くなってきました。非常にみなさん大変きつい思いで、まともな脚を持って歩いている人は誰もいないんですよ。足が腫れたり、膝がおかしくなったり、色々なトラブルを抱えながら歩いている。そうするとだんだん、これはあと10日後に到達するところなんですけれども、到達する嬉しさもあるんですが、実はそれ以上に私も含めてもう寂しさの方が、これだけの距離を歩くともう寂しさの方が。この写真もまさにその寂しさを表している写真だと私自身思って、大好きな写真です。

そして、先ほど言いましたように、町がくるとヒッチハイクして町に下りて、調達して戻る、その連続なんですけれども、ここはラストサプライと書いてありますけれども、最後の町です。この写真も私は大好きなんですけれども、彼らの背中から寂しさが漂っているんですね。

それからジョアン・メリー・ポンド、これもその素晴らしい風景のひとつをピックアップして今回お見せするんですが、こんな風景が至る所に、湖の淵にテントで泊まりながら、北海道にもこういうところはたくさんありますけれども。これも同じところです。この時はもう日が昇る直前から2時間全然動けなくて2時間写真を撮りっぱなしだったんですけれども、その中からたった2枚だけ持ってきました。刻々と変わっていくんです。

アビという、ネイティブアメリカン、要するにインディアン、それからアメリカ人はエスキモーという言い方をまだしていますけれども、彼らにとって神として讃えているような鳥です。このくらいの大きさと鴨の仲間なんですけれども、非常に不思議な鳥で、普通鳥は夜寝ていますけれども、夜活動するんです。だからなかなかこういう写真は撮れないんですけれども、鳴き方がオオカミと同じ鳴き方をするんですね。だからテントで寝ていると、夜中に湖の淵で寝ていると、「ウォーウォー」と聞こえてくるんです。それが実はこのアビなんです。

雪の中でスタートしましたがけれども、到達の頃はもうまさに秋も真っ盛り、私も含めてハイカーにとってこういう風景は、もうまさにレッドカーペットというイメージですね。

これもトレイルの最終地点に近いところの美しい風景。

いよいよ、これがマウント・カタディンです。あと2日後に到達するというところにある、ペノプスコットという川です。実は私がアパラチアン・トレイルを歩こうと思った個人的な理由は、楽しみのひとつとして、文学的な楽しみがある、いくつか文学的な要素もこの中に含まれる、その中のひとつに、ヘンリー・デイビッド・ソローをご存じの方はたくさんいらっしゃると思いますけれども、「森の生活」という日本でも色々な出版社から訳本も出ていますけれども、それを書いた人がヘンリー・デイビッド・ソローですね。アメリカの、先ほどジョン・ミューアという人が世界の自然保護のシステムを作ったという話をしましたが、実はその元々の理念を作った人がこのヘンリー・デイビッド・ソローなんです。日本で一番有名なのが「森の生活」という本なんですけれども、

そのほかにも何冊も本を出していますけれども、その中のひとつに「メインの森」というものがあります。これを私は高校の頃に、まだ訳されていない頃に読みまして、その時から非常にメイン州に憧れていました。そのヘンリー・デイビッド・ソローが当時 19 世紀、1840 年代ですけれども、インディアンに連れられてインディアンカヌーと一緒にこのペノプスコット川を大西洋の方からさかのぼってきてここで上陸して、実はマウントカタディンに登っているんですね。私の中では文学的な部分と非常にここで結びついて、非常に楽しみにしていたところですよ。

マウント・カタディンの麓に着きました。普段テント生活をずっとしてきましたけれども、ここはいわゆるキャンプグラウンドですから、車でも入れるところで、実はここに日本から私の妻が迎えに来てくれました。カナダ人の友人が二人ここに迎えに来てくれて、ここで感激の対面をしました。まさに紅葉の最盛期の頃で、こんなに美しい、10 月 5 日です。そこから見上げたマウント・カタディンですね。私にとって 80% 寂しさ、20% 達成感です。

6 日の日、最終日に登り始めました。先ほど下の方は湿地帯だというお話をしました。朝になると必ずこういう感じになります。上の方は針葉樹の森で、下の方は日本でいうダケカンバです。黄色い広葉樹です。

これは岩山で非常に厳しいです。こんな感じをずっと片道上りで 6 時間、下りで 4 時間、登ってきます。

これが最終到達した時です。12 時ちょっと過ぎに着きましたけれども、私の人生の中で最も感動的な場面のひとつです。この日はほかのハイカーも同じような時間に登ってきていたので、こうやってみんな登ってくる人たちとハグをしあって、もう男も女もみんな涙を流したりしていました。

アパラチアン・トレイル委員会の話もしましたけれども、全行程を歩いた人に対して、こういった認定証を発行してくれます。これも歩くモチベーションのひとつとして、日本でも先ほど信越トレイルの話をしましたけれども、そこでも今ちょっと考えています。これは、例えば 50 キロでも 80 キロでもいいんですけれども、実はこれともうひとつ、私にとってはこれの方が魅力的だったんですけれども、「MAINE TO GEORGIA APPALACHIAN TRAIL」というこのワッペン自体は色々なお店で売っているんですが、この下の 2000-MILER というのが称号なんですよ。歩き通した人にこの称号をくれるんですよ。これは私の中でもう子供のように、これが欲しくて歩いた、そういう大きなモチベーショ

ンのひとつだったんですけれども、非常に重要な要素だと思っています。

一応アパラチアン・トレイルの話は終わりなんですが、それに基づいて、それを基礎として信越トレイルを作りました。長野県と新潟県にわたる位置です。関田山脈という山脈を80キロにわたるトレイルです。一番端に有名な斑尾という、斑尾スキー場として有名ですけれども、そこが西側の基点になります。遠くに見えるのが日本海です。日本海を見ながら歩く、ブナの森です。基本的にこれは全部ブナの森です。日本でも最も積雪量の多い豪雪地帯です。一昨年4月に信越トレイルの関田山脈に行った時に、4月の時点でまだ6メートル積雪がありました。その時は10メートルは間違いなく超えていた、里に下りてもこれだけの積雪量なんですね。それからこれは千曲川です。千曲川のほりにある菜の花畑なんですけれども、北海道であろうとみなさんもちろんご存じの、「ふるさと」という歌がありますよね。「うさぎ追いしかの山～」というあの「ふるさと」、それから「朧月夜」、「菜の花畑に～」まさにこれがそうなんですよ。そういう「ふるさと」の歌も「朧月夜」の歌もまさにこの風景の歌なんです。そういう魅力のあるところです。ブナの森の中を歩くトレイルです。

夏の風景ですね。それからここは、自然だけではなくて、信州側と越後側とに十幾つの古道がありました。それをまた発掘していこうということも大きな目的で、このトレイル作りをしました。

これも江戸時代にできた古道のひとつです。

ここに設立の目的が書いてありますけれども、今申しましたように自然環境の保全、持続的な利用、それから今言いました歴史・文化の継承、それから環境問題への意識啓発、それからもちろん新たな観光による地域の活性化、みなさんが考えていらっしゃるのとまったく同じだと思います。それから私が作った理念の中に、厳しいルールを作しましょう、という考え方を盛り込みました。ここに書いてあることは当たり前のことを、こんなことは書かなくても本来はみんな守るべきことなんですけれども、実はそれを文書化したものというのは日本ではほとんどないんですね。国立公園の中には自然公園法という法律がありまして、その中には実は厳しいルールがあるんですけれども、実はそんなことを知っている日本人はほとんどないんですね。アメリカ人はそういうルールを知っています。何故かというところを子供の頃からきちっと教育しているから、自然を守るためにはこういうルールを守らなければいけないよということをやっているんですね。例えば私は今信越トレイルをやっているんですけ

れども、当たり前のことなんですけれども、タバコを吸う人は必ず携帯灰皿を持って行く、それからアメリカはルールで決まっていますけれども、水辺から100フィート、だいたい30メートルですけれども、30メートル以上離れたところじゃないとテントを張ってはいけません。それから川で洗濯や食器を洗っちゃいけません。当たり前のことなんですけれども、全部30メートル以上離れたところでやりなさい、ということが文書化されているんですね。それは学ぶべきことだと僕は思います。僕が一番好きな山のひとつが実は大雪なんですけれども、大雪山の一番源流部の石狩川の源流部のところにキャンプ場があるんですけれども、去年も行きましたけれども、日本人は未だにそこで食器を洗っています。当たり前のようにして。アメリカ人にとっては考えられないことなんです。そういうことをきちっとルール化をしようと、今のこういう時代ですから、厳しくすればするほどそれに反応してくれる人、共感してくれる人が多いんですね。そういう人たちはリピーターになってくれる人たちなんです。ですからある意味、僕は厳しくすればするほどいいんじゃないかと、そういう時代になっているんじゃないかと思っています。信越トレイルを作ろうとした時に、視察にも行きました。これはジョージア州のメンテナンス団体と一緒にメンテナンスを手伝いに行った時です。この時後にアトランタの大学生たちがテントを持って、テントサイトを作るボランティアに来てくれました。それをこうやって一緒になってみんなと私も仲間と一緒に作りました。そういうことも含めて、ハードウェア、そういう経験も含めて、信越トレイルを拓いていくところです。基本的には全部手作りでやる、爪でひっかいただけのトレイルにしようということがひとつの謳い文句になっています。これは全部地元の方です。それからこれは道標をやはり地元の方が運んでくれたところです。統一した道標というのがやはり必要になると思います。所々場所によっては歴史的な、文化的な要素もありますので、そういうガイド版も作っています。それから、今地元の方とお話ししましたが、この中には東京や大阪から来てくださっている方もいます。

これは環境モニタリングをしているところです。2005年に、私がアパラチアンを歩いている時なんですけれども、7月にオープンして、その年の7月以降に3回にわたってトレイルに関する環境モニタリングをしようということで、信越トレイルクラブが、ホームページをもっているんですけれども、そこで、環境モニタリングをするのにそれぞれ専門家が当然必要になりますよね。地質学だ

とか森林学、動物学。大学の先生方をお願いしたりするとお金がかかるんです。あくまでもボランティアでやっていますので、ホームページでボランティアでやってくれる人はいませんかという募集をしました。なんと、3回夏から秋にかけてやったんですけれども、3回でのべ300人応募してきました。元林野庁のOBの方だったり、大学の生物学の先生だったり、そういうそれぞれのジャンルの専門家たちが応募してきてくださったんですね。それは非常にご参考になることだと思います。

これはたまたまこの真ん中にいるのは田部井淳子さんですね。田部井さんと私は実はもうひとつ日本トレッキング協会というNPOを作っています、田部井さんはその仲間なもんですから、一度この信越トレイルを歩いてもらいたいと思って行った時なんですけれども。あとはこのガイド組織です。登録制にしています、今は25人がガイドとして信越トレイルで活躍、活動しています。それから年に1回検討委員会というのを行っています。これも環境モニタリングとも関わっているんですけれども、それぞれの分野の大学の先生方も含めた、トレイルの状況をモニタリングした結果をここで検討するという委員会も設けています。これは信越トレイルクラブというNPOの理事会とはまた別の組織をあえて設けています。第三者機関ですね。これもとても重要な事です。

それから学校教育ですね。自然もそうですけれども、地域の文化、歴史が埋もれてしまっていますよね、日本のあらゆるところで埋もれてしまっている地域の文化や歴史をやっぴり地元の子供たちに理解してもらって、将来に継承してもらいたいということも信越トレイルクラブの大きな目的のひとつですから、地元の小学校、中学校、幼稚園も含めて自然教育をさせていただきます。実際に小学校1年生の人たちを集めてこうやっています。

これが私が最も好きな季節のひとつです。6月、5月末くらいでもこんな感じですね。北海道でもいくらでもこういう風景がありますよね。北海道もこんなに美しいので、美しいんだといいにくいくらいですけれども、これは西の端で、有名な野尻湖です。斑尾のエリアですね。正面が黒姫山で右が妙高山です。

それから斑尾のエリアにこういう湿原地帯があります。途中にこういう小さな池などもあります。

秋になるとこういう感じですが。全部切りひらくわけではなくて、既存の道を利用するということを基本にやっていますので、こういう使われなくなった林道も地元の森林管理所と契約を交わしてやっています。これはブナの森です。



冬になると、まさにこのエリアもたくさんのスキー場があったんですけども、北海道も同じだと思いますけれども、いくつもスキー場が危うくなっているし、この信越トレイル沿いでも二つのスキー場がつぶれてしまっていますので、冬の活性化をねらって、スノーシューのイベントを年に何度も行っています。この時は加藤則芳と歩くスノーシューイベントで、150人くらい集まってくれました。

以上でアパラチアン・トレイルと、それに基づいて理念を作り上げて、その理念に基づいて作った信越トレイルのお話をさせて頂きました。ありがとうございました。

## 2. 基調講演「ロングトレイルの目的 今日的な意味」

講師：中村 達 氏（アウトドアプロデューサー）

中村でございます。どうぞ宜しくお願い致します。「ロングトレイルの目的 今日的な意味」というけっこう難しいテーマで困ったなと思っておりますけれども、実は北海道の方には年に何回かお邪魔をしています。ちょっと前までは北海道オートリゾートネット協会さんから何回かお呼び頂いたり、あるいは十勝の方には、あうるずの菊池さんから招かれるなどして何回かお邪魔しております。加藤さんの方から今アパラチアン・トレイルとそれから信越トレイル、日本版ですね、そのお話がございましたけれども、僕の場合はいわゆるマーケティングといいますか、少し違う視点でお話をしたい。我々が今やっている活動についても少しお話をしたい。僕のメインの仕事は実はこの30年ほど、日本でアウトドアーズのマーケットをどういうふうに広げていったらいいかというのをテーマに実はやってきました。先ほど部長さんの方から自然体験という言葉が出てきましたが、僕は自然体験というのも非常に大事なキーワードだと思います。ただ北海道に来てみますと、自然体験のコンテンツがやや薄らいでいるというのが肌で感じているところです。そういうものも含めて、このロングトレイルとは何者ぞということで、何をしようとしているのかということをお話したい。基本的には、このままでは日本のアウトドアーズはなくなるであろうと非常に危機感を持っています。そういう意味では、やはり産・官・学をあげて子供たちをもっと自然に、ということを引きちと、そういうスキームを作る必要があるだろうということで、歩くということテーマにいろいろロングトレイルを実は日本中に提案をしました。そうしたら、いろいろなところが面白いからやろうということでのってきた、ということで、逆にのって頂いてえらいことになったな、というのが実はありまして、一昨日も長野県の2カ所に呼ばれて行っていました。この後帰ってすぐまた千葉県に行かなければいけない。その辺も含めてちょっとこれから、何を考えているんだ、どうしたらいいかということについてお話したいと思います。

まず、できれば先ほど加藤さんからお話がありましたように、日本にはロングトレイルという概念の道が本当に少ない、やっとな信越トレイルができて、もう1カ所できるかな、というところですが、ロングトレイルとう概念は実はなかったんです。それをみんなで作ろう、というのがロングトレイルです。でき

たら総延長 3,000 キロくらいつくりたいというふうに思っています。先ほど北海道で聞いたら 3,000 キロは北海道ではすぐできると言われて、そうかと思って、もっと増やそうかなと今考えているところです。基本的には、山麓や自然豊かな地域を歩くこと、というのをテーマにしたい。そして目的は歩くステージをきちっと作って観光地の活性化を図ろうというのがお題目です。もちろんそのベースには、日本で自然体験活動とかアウトドアーズをしっかりと普及していこうということを基本にしています。いろいろありますけれど、基本的には歩く旅というのがこれから需要が高まるというふうに想定をしています。これは後で数値でお話をしていきます。それからやっぱり団塊の世代についていろいろ言われていますが、今の日本のマーケティングは団塊の世代中心とされていますが、実はそれほど団塊の世代はお金を使ってくれないんですね。みんなケチなんですね。そういう意味で、お金がかからず健康になって、夫婦がやっとなりになる、というのが団塊の世代でございますので、そういう世代に何をしたらいいか、やっぱり旅かな、歩くことかな、ということで調査をしますと、団塊の人たち、我々なんですから、何がしたいですか、という中でやっぱり一番は旅がしたい、歩きたい、自然に行きたい、そういうことが出てくるんですね。じゃあそういうものを満足させるステージをいみんなで作ろうというのが今回のお話です。もちろん健康志向、増加する時間をどういうふうにクリエイトしていったらいいか、生き甲斐をどう求めるかというのが大きな大きなテーマです。いろいろなことが要求されますけど、国、政府は我々にライフスタイル、ライフデザインを提案はしてくれません。これは国民が考えていかなければいけない。我々でやはりきちっと考えていかなければいけないという時代に来たと思います。いいか悪いかは別にして、とにかくロハス、あるいはスローライフという言葉がトレンドとしてある。僕はあちこちの首長さんから呼ばれるんですけども、うちはロハスな町にするとかいうおじさんがいっぱいいるんですが、分っていないなと思うんですけども、とにかくロハスというのがテーマになっている。少しこれは飛ばしますけれど、僕らがテーマにしている日本のアウトドアがどうであったかというようなことをザッと見てみます。これは戦前でございますけど、やっぱりいわゆる近代アルピニズムでヨーロッパからヨーロッパ式のスポーツ団が入ってきて、日本の山に入っていくんですね。それで戦後 1956 年にマナスルが登頂されて、黄色い三角テントを持って山に行く林間、臨海学校が行われるんですね。これは安上がりの民主主義教

育なんです。この洗礼を受けたのが実は団塊の世代からそのちょっと下までですね。だから実は自然体験というのはこの時代にすごくやっていたんですね。これが継承されていないというのがかなり問題なんだけど。その後、山の方では1970年代から高度成長で、海外登山ブームが起こる。僕がカラコルムの遠征に行ったときは日本から80隊いたんです。そんな時代があった。その後バブル経済のスキー、スノボブーム、「私をスキーに連れてって」とかですね、「見栄スキー講座」なんてのが流行りましてね、この時に日本は本当に、思えばスキーバブル。1976年に、アウトドア、実際にはアウトドアスポーツと言うんですけども、ヤマケイ（注：山と溪谷）から出てくる。この時に初めてアウトドアという言葉が市民権を得ます。1981年にBE-PALが小学館から出ますから、やっこの辺でアウトドアなんだということに日本がなっていく。ところが、景気が悪くなってきて、何が流行るかというオートキャンプが流行ってきました。ようするに安くて近くで手軽にできるということで、オートキャンプでパジェロが売れる、そういう時代がありました。全国各地にオートキャンプ場が1,500も2,000もできた。ところがほとんどが稼働率が低くて、閉鎖とか、実はもうほとんど使われていないとか、という状況が今起こっている。その後1990年代に日本百名山ブームが起こります。だからこれは中高年にとっては絶好の遊び場所が出来たんですね。それであちこち行く。それに並行してスキー場の経営不振が起こっている。全国に650あったスキー場が今どんどん減ってきていまして、たぶん500を切るだろう。半分は無くなる、間違いなく無くなっていく。どうしてか。スキー人口がないからです。単純な話です。その後2003年から文科省の方で学校の完全週休二日制、それから自然体験活動の奨励義務、自然体験活動をやりなさい、というふうになってきた。このあたりから少し変わってくる。それから今年からですけど、いわゆる2007年問題。このような言葉がどうもトレンドになってきた。これはちょっと余談ですけど、田舎暮らしと言いますが、僕は田舎暮らしはありえないと思っている。どうしてかという、ご主人が定年でやめますよね。奥さんがたはご近所のネットワークがあるんです。おっさんはなんもないんです。何もないおっさんが帰った時に、何もできないんですね。だからお父さんたちは頭の中で田舎へ行って家を借りて、農業でもして、というふうに思うんですけど、現実にはまず奥さんが反対する。それからそういう所へ、先ほど、加藤さんから話がありました信越トレイルのある飯山市に、田舎暮らし誘致課というのがあって話聞いていま

したら、ここで田舎暮らしをしてほしいから、そういう課を設けてやっているというんですね。ところがやっぱり地縁血縁がないところへいきなり行きますと、コミュニケーションができないです。やっぱりよそ者になっちゃう。それから車は1台でいいと思ったら軽トラがいるとかですね、村祭りとかいっぱい行事があって、実は出費が大変だとか、あるいは家庭菜園をやったはいいけど実は金網で囲わないとイノシシやシカが来て食い荒らし、とてもうまくいかない、そういうことがあって実は田舎暮らしと言われていたようで意外と住まない、というのが今の状況かなと思います。これは余談ですけど。

これが実は日本のアウトドアのデータです。あまり正しくない。こんなことを言ったら怒られますけど、あまり正しくない。ところがこれしかないんです。これは去年の白書ですので、今年はずいぶんこの間出たんですけども、あまり変わっていません。ただデータが訂正されまして、スキー、スノーボードを合わせてほしい700万人くらいです。これよりはかなり減ってきています。それからピクニック、ハイキング、野外散歩とありますけど、これは近所をブラブラするのも入っているんですね。ですから正確な数字じゃない。本当はもっと少ない。これから申し上げるのは、こういう人もとりあえず含みますが実はこの下の国内観光旅行の約6,000万人の人口が歩く人口にこれからなっていく可能性がある、潜在需要、全部じゃないですよ。僕はこの辺に、実は見ないといけないんだということをこれから申し上げたい。これが日本の百名山の風景です。みんなおじさんおばさん、元気な人ばかり、若い人はいないんですね。これは体操をしている、今年の白馬です。みんな、なんで日本人は同じ格好をするのとアメリカ人に言われるんですけど、こんな格好ですね。これは白馬大雪渓、こんなです。もうずっと下まで続いているんですね。もうほとんど中高年です。格好は僕はあまりいいと思わない。こんな格好しているから若い人が来ないんだと僕はアウトドアメーカーに言っているんだけど。アウトドアメーカーはマーケティングをして売れる物しか作らないから、こういう悪循環が起こっているんですね。まあ余談ですけど。こんな感じですね。もうみんな同じように歩かれるんです。これが日本のいわゆる中高年の登山の風景ですが、これも大きく今減ってきています。

これは、靴の売り上げ数を見てみました。黄色い線がウォーキングシューズです。ピンク色の線がアウトドア、トレッキングブーツとか、あるいは登山靴などのジャンルです。これが低減してきている。減りつつある。実はこのデー

タは去年ですけれど、今年はガクンと落ちてきています。これは各社の売り上げを見たらすぐわかる。ウォーキングシューズはもっと上がっている。このウォーキングシューズのカテゴリーの中には、例えばジョギングシューズを履いて歩く人もいるんですね、そういったものはここに入っていない、だから実際用途的にはもっとウォーキングの潜在需要はすごくあるんですね。こういう現実が実はある。これは実は今の日本の歩くということをテーマにしたマーケットの現状なんです。つまり、高い山はもういいよ、百名山も登ったからもういいよ、じゃあこれからは健康のためにウォーキングシューズを履いて、デイパックを背負って、なんか夫婦で旅に行こう、首からデジカメ提げて行こう、そういうようなものがトレンドになってきた。たぶんそういうのがメインとしてこれからマーケットが動いていくというふうに思っています。

これが出荷量ですね。一番右端にあるような靴が、どこの靴とは社長をよく知っているので言えませんけれども、こういうのが売れにくくなっているんですね。真ん中のようなものが売れてくるようになる。形としては色々ありますけれども、そういう状況が起こっています。

これが立山の5月です。こういう人たちが増えてきたんですね。つまり、今まで見て食べて寝るだけの観光からちょっと歩こうという人が増えてきたんです。というのが、実は先ほど言いました、約6,000万人の観光のトレンドなんです。これを北海道はどう掴むか、あるいは各地の観光地はどう掴むかというのが、ひとつの戦略になるだろうと僕は思います。この辺の部分が意外と抜けていて、ツーリズムとか、食べて寝るとか、そういうふうになっているんだけど、実はアメリカでは1990年代にアドベンチャートラベルという概念が出来て、要はITの社会の反動で、もう少し休みたいね、アウトドアに行っ、あるいは観光に行っても単に食べて寝て見るだけじゃなくて、少し歩こう、少しバードウォッチングしよう、あるいは馬に乗ろう、そういうふうに変わってきているんですね。そういうのが実はアメリカのアウトドアマーケットで4兆円です。ストロングと言われるのは、そういうふうに変わってきたんですね。この辺が大事。日本はまだそこまで誰も気が付いていないというのが、僕は大きな問題だと思うんですけれども。つまり、こういう状況が起こっている。

これは2週間前に、僕がコンセプトを作った自然学校です。浅間山麓自然学校というのを作りました。実は長野県に小諸市というところがあるんですけれども、いわゆる懐古園ですね。今ドラマをやっている風林火山の山本勘助が設

計したというお城があった懐古園、いわゆる千曲川旅情を藤村が書いたところですね。そこからスタートして行って、そこから 700 メートルですね。そこから 2,000 メートルの峠を越えます。標高差が 1,300 あるんですね。それを越えて、群馬県の嬭恋村まで 36 キロを夜中に歩くイベントです。これは 200 人くらい参加してくれているんですね。見てもらったらわかりますけど、どういう人が来るのか、こういうおじさんやこういうカップルがいたり、これはワコールの CWX というタイツを履いているんですね。脚の筋肉を補強して膝を護ってくれるものですね。それからちょっと年配のご夫婦が参加したり、おじさんたちが参加したり、よく見たら服がみんなバラバラでしょ？つまりこういう人たちが今歩き始めている、36 キロは、僕も去年出たんですけども、けっこうしんどいです。加藤さんだったらスッと行っちゃうと思うけど。大変。そういうところに、こういう人たちがへっちゃらで来るんですね。真夜中に歩くんですよ。7 時に始まって、朝の 5 時ですから。こういうものに若い人たちも来だしているんですね。だからこの辺のトレンドはやはりしっかり押さえる必要があると僕は思っています。ご家族もけっこう来られていましたね。

一方で、また数字ばかりで恐縮ですけど、実は先ほど山の物が売れていないと言ったけど、アウトドアウェアは売れているんです。一番実は出荷高が多いんです。こんなに売れているのはどういうことかということ、ひとつはカジュアルで着るのもあるけれど、やはり旅着に着たいんです。ちょっと旅行に着ていこう、つまり、そういうものを着て自然のところに行きたいというニーズは潜在的にすごく強いんです。ただそれをきちっと受けてあげるソフトウェアとハードウェアとシステムが実はない。この辺が大きな問題だと僕は思います。サッカーがいくら盛んだと言ったって、352 億です。これは出荷高ですから、小売りに行きますとだいたい倍くらいになるんでしょうか。さっきのスキーの北海道の関係のデータをちょっと開いてみました。スキーは実は一昨年あたりに底を打ったと言われています。ところが先シーズンは暖冬でしたから、ガタッと落ちています。在庫がやっと適正になったかと思われたんですけども、これがさらに底割れです。非常にひどい状況になってきています。ちなみに一番スキーが売れた時は 1993 年辺りです。その時日本のメーカー、商社が市場に出したスキーの額は 3,500 億です。今は約 400 億です。スノーボードを入れて 700 億あるかないかです。そのくらいひどい状況です。これはあるアウトドアメーカー、スポーツメーカーですが、やはり登山というものから、旅に変えていこう

と、今マーケティングをシフトを変えています。やはり世の中のトレンドを見ながら、変わってきたんですね。もちろんそうじゃないところもありますよ。でも、マスマーケット全体で大きなビジネスをしようというところはそういうふうに変えてきています。

雑誌を見てもらったらわかりますけど、こういうトレンド誌もやはり歩くことがライフスタイル、自然ということをテーマにしているんですね。

これは下が JR 東日本の今月の PR 誌です。これは巻頭に加藤さんがエッセイを書いておられますけれども、やはりこれも国立公園を歩くとか、自然がテーマです。つまりだいたいこういうふうになってきますね。ちなみにアメリカのアウトドアの人口を見ていきますと、このぐらいあるんです。かなりリアルな数字なんですね。これは累積ですから、かぶっていますけど、いわゆるヒューマンパワーアクティビティだけで 1 億 6 千万人の人口があるんです。かなりリアルな人口なんです。例えば自転車、二つ目ですね、8,500 万人いるけど、これもきちっとカテゴリーに分かれている。つまりマウンテンバイカー、アスファルトの上を走る自転車、それからシングルトラック、このぐらいの幅を走る自転車、はっきり分かれた合計なんですね。非常にしっかりしていて、だから産業として成り立っているという部分があります。ちょっとこれは細かくて見にくいんですけど、右端の赤で囲っているところは、年代別にどのぐらいのパーセントがあるかということです。日本のアウトドア、スキーも含めたレジャーのピークが子供たちも含めてだいたい 50 歳から 40 歳なんです。そこから 10 代に向かって急降下するんです。ですから、例えばスキーなんかは 40 代がピークです。そして 10 代に向かって下降しているんです。ということは、どういうことかということ、次の 10 年間スキーがないんです。それが面白いと思っているんじゃないんですよ。困ったことなんです。ところが、これを見てください。これは平均ですけど、各年代ともフラットにいるところが違うんです。そこが実はヨーロッパやアメリカと日本とが根本的に違うところなんです。だからそういう意味では、日本のアウトドアの現状は非常にきびしいというのが僕の認識です。それで、先ほど加藤さんからもお話があったんですが、海外には、ヨーロッパにもそうですけれども、アメリカにも代表するトレイルがある。イギリスには累計ですけど 22.5 万キロのフットパスがありますね。それからヨーロッパに行きますと北欧から地中海に向けて 6 本のトレイルがありますね。ちゃんと NPO が管理している、つまり歩く道が整理されている。日本はなかなか少な



くて、僕が唯一トレイルだと思うのは、四国巡礼、お遍路だと思うんですね。そういったものがきちっと整備されていない。後で申し上げますけど、じゃあどうしてお遍路に行くのかというと、もちろん宗教的なこともありますけれど、やっぱりなにかをもらえるからなんですね。ハンコをもらえるから、記念に登る。先ほど加藤さんが図らずもおっしゃいましたけど、2,000マイル歩いた、というワッペンだけ欲しい、そういうものが何かあるんですね。特に大事なのは、日本人、特に団塊の世代や企業戦士であった人というのは、会社から売り上げ目標とか言われるからやるんですね。だから歩くことはなにか目標がなかったらやってくれないんじゃないかと僕は思うんです。そういう意味ではやっぱり、きちんと歩いたら何かをあげるというのは大事なシステムだと思います。

これも僕は全部歩いたわけではないんですが、ほんの少し、さっき加藤さんがおっしゃったアパラチアン・トレイルのマウント・ワシントンの辺りを少しだけ歩いたことがあるんですが、こういうのがへっちゃらで出てくるんですね。家族でトレイルを歩いているんですね。なかなか日本とはほど遠い景色です。こういうトレイルで色々な可能性というか、例えば僕らが考えているのは、トレイルを作って、このトレイルというのは、今ある道を使うんです。例えば自然歩道とか登山道とかハイキング道とか、あるいは散策路とか、時には国道とか、そういったものを結びながらトレイルを作りましょうということを今提唱しています。例えば、宿泊施設もとっていきましょう、あるところに行けば、お金のある人はホテルに泊まって下さい、ない人はテント場があるので泊まってください、ということも設定しましょうというようなことを申し上げています。具体的なところで申し上げますと、こういうルートは山岳景勝地、名所、旧跡、社寺仏閣、観光施設、公共施設、その他アウトドアスポットなんかあまねく訪ねるようにしましょう。そして今ある道を使います。だから新たに道を作るんじゃないというのが基本的な考え方です。ここで大事なのは、もう山へ上がるのはやめようということを僕らは発想しているんです。というのは、これは我々の反省なんですね。僕らも若い時はずっと山を登っていましたが、それも登山家の目で見えてしまう。そうすると、他の生活者とかあるいは歩いてみたい人と目線が離れてしまうんですね。そうじゃなくて、もっと下へ行こうと。だから景色のいいところを、ゆっくり負荷なく歩けるような道を探そうと。これを大きなテーマにしています。これから随時情報は、いわゆるインターネット、携帯で見れるように考えています。それともうひとつは、大事な

は、ルートというのは横軸だけでみんな考えるんですけども、縦軸があるんですね。何かといったら、春夏秋冬で景色が違う。それから色々な町で、色々な村で、あるいは色々なところでイベントがあったり行事があったり村祭りがあったりします。そういうものを書き込んでもらうようなサイトを立ち上げる。それと歩いた人が、今日はあそこに桜が咲いていた、こんな花が咲いていた、というようなことを書き込んで、常に道がライブ感を持っているようなものにしていきたいというふうに考えています。

ルートサインをどうするかという問題がありまして、これから申し上げる事例で申し上げたいと思います。できるだけこういうものは極力少なくしたい。加藤さんのお話にもありましたけれども、ニュージーランドでもそうなんですけれども、トレイルを歩いていましたら、本当に道標ってないんですね。このくらいにないの？大丈夫>というくらいにパッと出てくるというくらいですけども、なかなか日本人というのはそういう習慣がないので、ある程度きめ細かくする必要はあると思いますけれども、できるだけ少なくしたいと思っています。実は、これは各トレイルによって違いますけれども、出来たら会費をとりましょうと。終身会員で2,000円くらいでどうですかと歩く人に提唱しています。1,000円は認定したり表彰状をあげたりする管理費として頂きます。あと1,000円は、トレイルの補修に使いましょうというような言い方をしています。それから、どうして認定していくのということですが、これは旅館とかホテルとかコンビニとか、道の駅とか、そういうところに行けばカードにハンコを押してもらえる。それで例えば北海道1周、仮に1,000キロであれば1,000キロ、あるいは十勝1周300キロであれば300キロ、認定が受けられるというような制度にしたいと思っています。基本的にはインターネットを考えています。こういうバッジをあげる、ネタをばらせばこのバッジはブリキなんですね。インターネット上で作れば、1,000個作ればだいたい30円から60円くらいで出来る。このバッジをもらいにみんな来るから、あまり費用負担が少なくて運営できるだろうと、こういうこともひとつ、案としてあります。サポート会員として、旅館とかホテルとか民宿とか道の駅、ガソリンスタンドとか、色々な所をお願いしようと思っているんですけども、そういうところへ歩く人が行けば、水を提供してあげてください、それからトイレは使わせてあげてください、ということは今お願いしています。道周辺で色々なイベントをやったりということもできる、ということで、現実に今始めています。実は今やっている当在地の

自治体、観光協会あるいは連盟、商工会議所なんかが中心に協力を頂いています。それから自然学校とか青少年育成団体とか、施設とか、それから国の方では国交省、環境省、厚労省、農水省、林野庁、その他色々ご協力頂いています。それから想定スポンサーとしては、電気通信事業者、スーパー、コンビニ、運輸鉄道、観光事業者、スポーツ業界その他、ということで今お話をしています。

これが事例でございますけれども、今、浅間山麓、軽井沢から歩きまわると浅間山の 2,000 メートルラインを超えてぐるっと嬭恋村へ行ってまたまわってくる、170 キロのコースを設定しました。これは目的は地域の活性化を図りたい、やっぱり観光地が疲弊してきていますから、そういったことで新しいお客さんが来て欲しい。先ほど僕が申し上げた社会背景があってそういうニーズがあるんだから、そういう人たちに来てもらおうということを今考えています。もちろん地域の文化、民族なんかを発見してもらおう、それからもうひとつは地元の人たちにも歩いてもらおうということで、一所懸命やっています。それから、観光局などでも当然コンテンツに入っています。

これが浅間地域だいたいのは図ですね。軽井沢、御代田、小諸、東御、嬭恋村、群馬県ですね。これだけにまたがるんです。各自治体から役人さんに委員になってもらって、運営は自然学校がやります。各自治体あるいは観光協会でおたくの地域ではどこの道がいいのか？ということを考えてもらったんです。そうしたらここです、そいうのが出てきたんです。それをまとめたんですね。これを繋げたらこうなったんです。一筆書きです。口の字型に 170 キロぐるっとまわれるようになっていきます。これがとりあえずできました。これは実は昨年の国土交通省の風景街道に認定されています。これからこれがどんどん動いていきます。スキームは今申し上げたとおりこういうものですね。お金の方は、高い安いとは僕は申し上げませんが、国交省から頂いている。それから林野庁からも出して頂いている。環境省も入れて、と言ってきていますので、出してくれるならいいよ、という話を今しています。現在調査が全部終わっています。トレイルマップの作成もほぼ概念図が終わりました。これから詳細をつめていきます。今年の 3 月 14 日にシンポジウムを開催しました。加藤さんにも来てもらって周知しました。おかげさまでなんとかうまく動き出しました。今申し上げた構成メンバーですけれども、地元の役場の人たち、あるいは観光事業所の方たちに、実は委員、オブザーバーになってもらって、いわゆる産官挙げてみんなで頑張ろうという運動を作っています。いろいろな役所にまたが

っていますね。それから各自治体にも入ってもらっている。

全国の動向は、北海道はとりあえず少し予算化されたということで、これからどうなるかというのはありますけれど、北海道1周できればいいですね。千葉の房総半島に今作ろうと思っています。去年の12月千葉県の知事にお会いしたので、やりませんか、と言ったら、やりたいということだったので、一気に進みました。再来週、南房総市で第一回の委員会を開催致します。房総半島は関東のはずれにあって、なかなか人が来てくれないんですけれども、非常に自然が豊かで海に面していますから、1周できればいいなど、これも地域活性化で考えています。南房総市、それから去年出来たNPO法人の千葉自然学校を中心に運営していこうと考えています。それから今申し上げた浅間ロングトレイルですね、これは自然学校が中心に今運営を始めています。それから八ヶ岳の山麓スーパートレイル、これは八ヶ岳の山麓1周です。175キロあります。ほぼ1,000メートルラインで絵が描けました。これは山梨県の北杜市、それから長野県の茅野市を中心にやっています。もともと観光連盟で立ち上げたんですけれども、もう少し違う機関がいいねということになってきまして、商工会議所の方が頑張ってやりましょうということで、今予算を一所懸命やってくれています。これから色々なかたちで出てくると思うんですけれども、この委員会が一昨日、茅野市でありました。僕も呼ばれて行ってきたんですけれども、その時に話を聞いていますと、非常に面白いことがあった。その委員会のメンバーの一人が、ペンションを経営されているんですね。八ヶ岳には蓼科というのがありまして、年間500万人くらいお客さんが来るんです。観光客が来るんですが、東京に近い、しかもオリンピック道路ができて新幹線が佐久平まで通ったので、日帰り客が増えたんです。だから泊まってくれない。だから観光と言いながら土産物もあまり売れないんですね。滞在型でやってきたがスキーもダメ、ということで、地域が疲弊してきている、何をやっているかといったら、ゴルフ場があるので、韓国から今一所懸命お客さんを誘致しているんですね。そういう状況である、そういう中で、やっぱり東京から来るお客さんを泊めて、なにかさせたい、ついては、歩くということは非常にいいテーマだということで、スーパートレイルのごく一部、20キロですけれども、そのペンションのオーナーが自分のペンション中心の20キロの道だけを最初のスーパートレイルとして始めたんです。そうしたら、去年は1人しか来てくれなかったのが今年は40人来てくれたそうです。それだけで。そしてそういうお客さんの中で声が上がってき

て、自分たちでメンテナンスをしたい、そういうようなことをやりたいという声が上がってきたんですね。たった 1 軒のペンションがちょっとホームページでやっただけなんです。つまりどういうことかということ、詳しく聞いてみますと、「これだけニーズがあると思いませんでした。やっぱり歩くというのは今日的なテーマですね。」と、観光資源として茅野市はやっていきたいということでした。これから動きます。

あともう一つは、比良・比叡。僕は今滋賀県の田舎に住んでいるんですけども、もともと京都なんですけれども、琵琶湖がありまして、琵琶湖の西側に歩いて行って京都の方に向かうと、鯖街道という、日本海から京都の御所にさばを運んだ道があるんですね。もう今は国道ですけど。そこをぐるっとまわって行く道、だいたい 120~130 キロくらい作れるということです。それを今始めています。そうしたら京都市もぜひ入れてくれということで、一緒になってやってきた。この比良・比叡の自然学校というのは僕が作ったんですけども、これはちょっと違うんです。参考になるかもしれないのでちょっと入れておきますと、延暦寺と一緒に作ったんです。日本の文化、日本の森の文化、1,200 年の最澄が作った文化をどういうふうにして外国に伝えていったらいいかということを考えてたんですね。先ほどちょっと宗教の話も出ましたけれども、イスラムにしてもキリストにしても一神教ですから、やっぱり宗教戦争が起こってくる。世界中が東洋の知恵を出しなさいと言っている。これをどういうふうに観光の資源にしていくかというのが大きなテーマですがなかなか手がついていないんですね。そこで考えついたのが、千日回峰行者というすごい行をやっているお坊さんがいます。そのお坊さんを中心に、比叡山の森、1,200 年の森の、樹海の文化を外国語でインタープリテーションしようということで作った自然学校です。その自然学校のテーマとして、まずロングトレイルをみんなでやろうよということで、スキームを作りました。今 30 人くらいが集まって歩いて調査しています。これは大津市の方から予算をつけてもらっていますね。それから実は（同様の構想が）いっぱい挙がってしまっていて、塩の道ロングトレイルを作らませんか、と長野県の白馬村の村長に提案したら、それは良いということで今始まったんです。じゃあもっと行こうよということで、糸魚川から富士川まで歩いたらどうだろうと、そうしたらフォッサマグナトレイルが面白いねと。それからこの間群馬県のみなかみ町に呼ばれて行ってきたんですけども、谷川岳の下にトレイル作れるよね、やりたい、ということで、僕は話を聞かせて

くれということで行ったんですけど、今日みたいに行ったら「谷川連峰ロングトレイル」なんてこのようなシンポジウムになっていてびっくりしたんですけども、それくらい盛り上がっていますね。それから白山がありますね。加賀の白山です、白山をぐるっと一周できるトレイルができないかということで、たまたま、自然学校を作ったときに清水國明氏から電話があって、作ったから顧問になってくれと言われた時に、白山をぐるっとまわるトレイルをつくろうと言ったら、それはいいなと言っていました。その前にトヨタ自動車がお金を出した自然学校というのが白川郷に、反対側にありますね。白川郷の自然学校には提案しています。やりたいと言っています。だから両方でやればけっこう面白いトレイルができるかなと思っています。それから魚沼トレイル、これは別件で行ってきたら、市議員さんが寄ってきて、魚沼にトレイルを作りたいと、魚沼三山があるから作れと言ったら、やりたいと言って、今委員会ができあがりました。それから聞いているとこれも国交省絡みなんですけれども、利根川水系をずっと上がっていくトレイルができないかということです。あるいは大山一周トレイル、そんな話がたくさん出てきてちょっと困っているんですけども、つまりどうもこれは歩くということが少なくとも間違いないテーマである。なおかつ記号とかシステムとかソフトウェアとか、そういうものが整備されていない、この辺を人間の力で、土木工事ではないので、我々の知恵で、あるいはネットワークで、みなさんと共同して作っていくチャンスが僕は今あると思います。そういうステージをしっかりと作ることがやっぱり国民の健康に繋がっていくし、そういうステージができれば若い人たちももっと来てくれるだろうと、そうすると先ほど申しました自然体験が、日本はなかなかうまくいかない、アウトドアのマーケットも減っている、やっぱり子供たちが自然の中に入って行って不思議発見の世界をずっとやっていくことによって、チャレンジ精神が生まれるし、それがひいてはベンチャーに繋がっていくと僕は思います。そして若い人たちが自然に行かない国というのは、僕はダメになっていくんじゃないかと思っています。そういう意味で、トレイルというのはそういうコンテンツ、哲学を持っているんだということをぜひご理解頂いて、みなさんぜひ北海道でいいトレイルをお作り頂けたらなというふうに思います。

実は今日の十勝でのロングトレイルとは名前は違いますがけれども 9 月 21 日、そして 10 月 23 日、これは加藤さんがおやりになっている、僕も参加させてもらっている高島トレイルサミット、滋賀県ですね。浅間山トレイルフォーラム

は11月に軽井沢でやります。それから11月に八ヶ岳スーパートレイルシンポジウムをやります。これは一応17日に決まりました。それから3月くらいにこういう主なトレイルの地図ができると思います。それから3月に比良・比叡トレイルシンポジウム、大津でやります。それから3月に、これは予算が林野庁から出してくれるようになりまして。浅間山麓ロングトレイルシンポジウム。それから来年の7月に東京で全国ロングトレイルシンポジウムをやります。今日も道すがらお話したんですけれども、北海道がスタンダードに僕はなと思うので、北海道ロングトレイルシンポジウムをぜひやってほしいと思います。そして全国に呼びかけましょう。それともう一つはアメリカなんかに行きますと、ナショナル・トレイル・デーというのがあつたんです。一斉にトレイルを歩く日なんですね。それは一斉にはなかなかできないでしょうけど、こういうトレイルができますから連動していく。来年は10月くらいに北海道でドーンとぶちあげたらいかがですか？それこそ旅行代理店も今日は来られているか分かりませんが、お客さんを集めてもらって、そういう盛り上げをおやりになったらどうか、それを出来たら、中国もあるいは韓国もこれからアウトドアブームが興ってきます。今年の夏、穂高に、唐沢に来るお客さんのかなり多い部分が、台湾、韓国、中国の人なんです。日本人はいないというくらい少ないんです。そのぐらい様子が変わってきているんですね。つまり経済が豊かになると必ず自然のレクリエーションが始まっていく。そういう時代だ。だから冬だけじゃない、夏の北海道を歩く。僕は国際化できることだと思うので、それを念頭においたスキームをぜひ組んで頂いて、来年の秋くらいに、北海道ナショナルトレイルデーか何かをぶちあげてやったらいいなあというふうになるんじゃないかと思います。ぜひご検討頂ければと思います。

琵琶湖の西側ですね。ずっと上がって行って、高島の辺から下りてくる。先ほど加藤さんがおっしゃった高島のトレイルはこの県境のあたり、このラインですね。余談ですけど僕は北海道に来るたびにみなさんから北海道は広いだろうと言われるんです。ところがこの辺にいますと滋賀県も広いんですね。心の中で北海道も広いけど滋賀県ももっと広いよ、と思っているんですけれども。一昨年、島根県に呼ばれて行きましたら、宍道湖は広いでしょ、と言われたけど、琵琶湖の方が広いんですね。全然関係ないんですけど。

房総半島はこういう感じになるかなと思います。北海道のどこかわかりませんが、ぜひ最高のトレイルは北海道にできます。世界に通用する観光として、

あるいはアウトドアズとして、しっかり発信できるのは北海道しかないと思います。パタゴニアの創始者のイヴォン・シュイナードに昔、インタビューしたときに、日本のアウトドアをどう思うかと彼に聞いたら、日本には北海道があるじゃないか、と、これは20年前の話です。

以上でお話を終わらせて頂きます。ありがとうございました。



### 3. 話題提供

#### 3-1. 「十勝における地域からの情報」

十勝千年の森 林 克彦 氏

みなさんこんにちは。今日は、先ほど中村さんもおっしゃいましたが、私も菊池さんにどうしてもやってくれと、ロングトレイルにはふさわしくないんじゃないかと、そんなに長い道はないのにいいんでしょうかということでお話したところ、ぜひ、ロングトレイルの点と点を結ぶ、点になってみればいいんじゃないかということで、お引き受けを致しました。

みなさんご存じの方も多いと思いますが、千年の森とはどういうところか、というところから始めさせて頂いて、千年の森でも楽しく歩く場所を何点か設けていますので、まあロングトレイルとまではもちろん言えませんが、どういったことをしているかということをご説明させて頂きたいと思います。

まず、十勝千年の森ですが、ご覧頂いているとおり、日高山脈の森と草原との接点でありまして、写真でも見て頂けるように非常にきれいな場所です。清水町、日勝峠の麓、ここから約40分くらいのところにありまして、敷地面積は約400ヘクタールございます。東京ドームで言うと80個分、その中の約70%が森林でして、この森林は十勝毎日新聞社が所有しております。理由は新聞というのは間接的ではありますが、木を切っているということになります。そこで、十勝毎日新聞社の社長、林光繁が、なんとか二酸化炭素を相殺したいということで、1,100ヘクタールの森林を所有すると二酸化炭素を完全に相殺できる、これをカーボンオフセット構想と呼んで、1992年に定款に育林業というものを加えました。おそらく世界で初めてでしょうし、未だ育林業というものを新聞社の定款にしているところはないのではないかと思います。10年間に約12万本を広葉樹にメインに植栽しております。こういう非常に素晴らしい環境の下でやっております。森づくりも通常の森ではなく、地元の清水町森林組合さんをお願いしているんですが、やはり従来ですと、この写真にあります、どうしてもカラマツ林が十勝は多いので、非常に早く成長して管理はしやすいと、非常に効率的ではありますが、針葉樹は酸性が強いといいますから、自然環境としてはあまりよくないのではないかと、それを十勝本来の森に戻そうということで、現在我々は十勝に生えているミズナラやカシワ、ヤチダモ、シラカバなど、

そういったものを植えています。環境に適したものを植えていこうということで、動植物にも適した森づくりをやっております。最初は何も勉強せずに森づくりを始めてしまったので、一気に大規模にカラマツ林を伐ったんですね。そうすることによって失敗したなど。そこにたくさん植えたんですが、風が当たる場所なので非常に成長が遅い。やはり森の中を歩いて頂きたいので、成長が悪いと単なる草原になってしまいますので、これはまずいということで、年々勉強し始めて、筋刈りもやりました。しかしこもなんだかすごく人工的で面白くないぞと、これも森づくりをしているぞ、といういい写真なんですけど、やはりこれが大きくなってくると、人工的になっていって、一列のミズナラが植わってしまう。現在では、だいたいこんなふうにもばらに間伐をして、まばらに色々な樹木を植えていっております。これは森林組合さんをお願いをして補助金も頂きながらやっているのですが、カウントや作業も非常にしづらいのですが、やはり観光と素晴らしい森づくりをしたいということで、今は道庁さんにもご理解を頂いてやっております。こういった感じですね。今はだいたい10種類以上の色々なパターンの森づくりをしておりますので、そういう意味ではおそらく日本でも最先端というか色々なかたちの森づくりをしているのではないかと思います。この森には、北大や畜大の先生たちも入って、色々な森づくりをしております。

これは植樹した後の写真なんですけれども、植樹も従来はこういうふうに一列にバーッと植えていくんですね。我々は今この植樹をやめました。やはりこれも人工的で、同じ種類の樹木ばかりを植えてしまうので、現在はこういうふうには、森の中から種を取ってきて、それを育てる。この育てるイベントも教育としてやっております。これを考えたのは北海道工業大学の岡村先生という方なんですけど、牧草地なんですけれども、牧草を一回はがして土を掘って、牧草を下に埋めます。そして黒土を上に戻して、その上にバークをひくんですね。このバークもカラマツ林の間伐したものです。そのバークを敷いて植えることによって、雑草の種が入りにくく、入ってもバークですので育ち難いです。雑草が育ちにくく日が当たりやすいので、色々な木が生えてくるシステムになっております。こういうふうには10種類だいたい植えて、この中の1本か2本が成長すればいいんじゃないかと、けっこうシカに食べられたりもしております。このいいところは、5センチくらいの樹木ですので、子供たちも愛情をもって木を植える教育ができております。その後の管理も非常に安くできます。普通だ

ったら笹刈りなどがその後あるんですが、我々はその笹刈りをしなくていいので、そういったこともこの辺の利点ではないでしょうか。そういった意味で、我々は単なる森づくりではなく、歩いて楽しい森づくりもやっております、笹刈りをしながら森の中に蒔いた種子を芽生えさせてあげる、そういったことによってこういったスマイレとか、クリンソウなどもたくさん生えてきたというか見えてきたというか、歩ける森づくりを現在しております。これもシラネアオイが非常に多く咲き乱れたり、ヤマブキソウ、エゾノリュウキンカ、オオウバユリなど、笹をきちっと刈ることによってたくさん生えてきました。

色々な楽しく歩ける場所があるんですけども、その一部として、我々は森を育てて間伐していますので、その間伐材を使って、こういうふうにチップを敷いて、楽しく歩ける場所を道のように作っています。あとは、ここは駐車場で、ちょっと歩いて蕎麦屋さんのレストランに行ったりするんですが、本当に短い森なんですけど、身障者もきちんと歩けるようにしようということで、間伐したカラマツのおがくずを樹脂で固めたものをこういうふうに道にすることによって、身障者だったり車いすの方々も歩きやすい道づくりを、現在しております。駐車場からレストランまで5分から10分くらい歩くんですが、最初は非常に文句を言われまして、どうしてレストランまで歩かなきゃいけないのかと。北海道はやはりレストランの目の前に車を止めて、すぐ食べる。ここはやはり小さな森なんですけど、5分10分森を歩くことによって、食べるまでは文句を言われるんですね。でも食べた後は心の余裕がでてきたのか、いい森だね、と帰りに言われるんですね。行くまでは文句を言われて、帰りによく見るといい森だねと言われて、現在は約5万人の方々に入場して頂いております、年々順調に増えております。もうひとつ、単なる森だけではやはり観光資源として弱いんじゃないかということで、現在はガーデン整備もしております。この方はダン・ピアソンさんという方なんですけど、イギリス人のございまして、代表作はダイアナ妃のメモリアルガーデン、あとは昭和記念公園とか六本木ヒルズを設計しております。この方になぜお願いしたかということ、我々の目指すガーデン、やはり後ろにすばらしい日高山脈がありますので、その日高山脈を壊さないガーデンにして欲しいと、あとは大きなスケール、北海道らしい、十勝らしいガーデンをつくって欲しいということで、彼にお願いしました。現在こういうふうに進んでいまして、約6割から7割終了しております、来年の7月、サミットに合わせての完成を予定しております。

こういう感じで、ここでは山羊のチーズを作ったりしております。

これがランドフォームと言っていて、これは大地のガーデンと言っているんですが、少し地形をいじることによってダイナミックなガーデンをつくらうということで、これはすでに完成しているんですが、なかなか皆さん歩いてくれないんですよね。歩いてみると非常に楽しいところなんです、やはり先ほどの加藤さんや中村さんのお話を聞いていると、目的とか歩く楽しさを伝えきれてないということで、逆に今日参加させて頂いて非常に勉強になりました。やはり、きっかけ、コンセプト、色々なものが足りないんだなということを感じております。

これが今言ったランドフォームですね。これは5メートルくらいの木なんですけれども、こういうふうに地形をいじることによって、こういうところを歩きながら、こっちは森なんですけども、この森まで楽しめる、まあ森まで皆さん行かないので、森に行くまでにどうこの地形を楽しめるようにできるかということで作りました。

我々としては、これ以外にもアートなどを、イギリスとかではよくあることだと思うんですが、こういうところにアートなどを設置して、それを巡りながら草原や景色、それと森を楽しめる歩く仕組みを作っていきたいと、それがやはり観光流動人口を増やすことによって、十勝の中の観光振興化や経済の振興に役立てていきたいと思っております。

そういったことで、今日は事例発表なんです、逆に加藤さんと中村さんのお話を聞かせて頂き、これを糧にまた頑張っていきたいと思えます。ありがとうございました。

### 3-2. 「十勝における地域からの情報」

十勝アドベンチャークラブ 山田 英和 氏

ご紹介頂きました山田英和でございます。屈足の方で、十勝アドベンチャークラブという、私は川ものの方なんですけれども、ラフティングとカヤックのアクティビティをコマーシャルとしている会社の経営をしております。また北海道アウトドア協会という NPO の副理事長をしているということで、今、山と自然とラフティングとカヌーと、それと乗馬、この五つの北海道のアウトドアガイドの資格制度と、それに伴う優良事業者、これらのものについての道の方から民間の方に施行権の委譲をうけて、それを実際に運営している、といったようなことを今、全道的にやっております。今日は実はシンポジウムのパネリストというつもりでやってきたものですから、情報提供という立場だと思わなかったものですから、何も持ってきませんでした。話だけのつもりで来たものですから、ごめんなさい。

今加藤さん、中村さんからロングトレイルの話がされたんですけれども、私が十勝 10,800 平方キロの土地利用からみていくと、やはり 7,000 平方キロの日高山脈、大雪、白糠丘陵、それから阿寒の一部、こういった約 7 割の土地利用としての山をもっております。この山について、実は非常に色々な問題がありますけれども、山が非常に荒れてきております。毎日川を見ていますと、実は非常に水の量がいっぺんに増えたり急にぐっと減ったり、ダムができていますからまだ十勝川は恵まれていますけれども、ダムの少ない川に行くと水の増減がものすごく激しくなってきました。この辺はやはり山が荒れているということのひとつの証左であろうというふうに思っております。それと十勝 10,800 平方キロというのは、いわば山の頂上をぐるっと囲って太平洋が一面にあるわけですから、源流から海まですべて我々は日常的な視野の中でこの地域の経営に関して責任もてる 36 万人であるなということを強く思っております。そのことをひとつベースにしてものを組み立てていくと、このロングトレイルというのは色々な意味で私どもにとって非常に楽しみと同時に地域経営の大きな示唆を与えてくれるのではないかというふうにも思っております。そんなことから考えていきますと、このロングトレイルのベースになるものは、趣味で乗馬もやっているものですから、僕らの乗馬クラブというのは、目指せ馬術競技ではなくて、楽しく乗馬をしようというコンセプトで運営されている乗馬クラブ

なものですから、一定程度乗れるようになると、常に色々な農道を使ったりとか小さな川を使ったりとか、林道を使ったりして、トレッキングに出て行きます。そうするとまた別の意味の色々なものが十勝の中に見えてきます。この辺のことをお話したのは、十勝 36 万人が、十勝の自然を、もう少し亜寒帯にいるということを楽しんだ方がいいのではないかとということを常々、60 歳になってからは強く思っております。例えば我が社では冬にスノーシュー、先ほど少し出ていましたけれども、スノーシューといういわゆる西洋かんじきをはいたツアーをしております。ところが、一般の方はなかなかスノーシューのツアーといっても装備も持っていないし、どこに行ってもいいかわからないので、僕らはお金を頂いて経営をしているんですけれども、今 9 年目ですけれども、なかなか十勝の人は、未だに一人もお金を払って来てはおりません。みんな東京の方がお金を払って 2 時間 3 時間のツアーに入っていきます。スノーシューの良さというのは、夏場全然入れないような川の上流部というんでしょうか、例えばトムラウシ温泉のひとつ手前に大きな滝があって、これは有名な滝なんですけれども、もうひとつ霞の滝という小さな滝があります。入るのに 2 時間くらい沢詰めをして行くんですけれども、歩くスキーかスノーシューで行くんですけれども、そういうところは夏は全然入れません。ところが冬は雪の上をゆっくり歩けるし、熊もいませんから、小さなキツネが時々出るくらいで、あとは鳥の声を聞きながら十勝を楽しむことができます。十勝にはまだまだ隠された色々なものがあるんです。この間、新得の方にまた新しいものが発見されましたけれども、そういった自然の中にあるものを、我々はきちっと自分たちの人生の楽しみにすることが、十勝の 124 年の開拓の歴史の中では欠けていたのではないかと強く思っています。我々は亜寒帯に住んでいるわけですから、やっぱり春夏秋冬、非常にメリハリのきいた地域です。先ほどのアメリカのロングトレイルを日常的な、車で行けばせいぜい 1 時間くらいのところからいくらでも新しいコースができてくると思っておりますので、そういったものを僕らはもっともっと楽しまなければ、地域経営の大きな資本としてのこの十勝をつくるのが、経営することができないのではないかと思っております。十勝という地域は皆さんご存じのように農業をベースにした大きな地域経営の基本にある地域であります。その作られているものを、きちっと売るためには、十勝の良さというものを我々自身が楽しまなければ、ジャガイモ一つ売るにしても、長いものは今評価が上がってきていますけれども、こういうところで作られたもの

は、安全で安心でおいしくて体のためになるんだ、ということ、我々自身ももっとアピールする必要があるのではないのかな、あえて言えば、時間があれば色々な話ができるんですけども、最近頼まれて話す時には、十勝人はお米を食べるのを止めようと、湿润温暖な稲作文化と我々自身は 120 年の歴史の中で決別しようじゃないかと。蕎麦もあればうどんもあればパンもあれば、要するに十勝の小麦を食べ、十勝のワインを飲み、まあ焼酎もあります、それから十勝の乳製品、チーズもおいしいものが高いですけれどもあります。そういったものを我々の日常的な生活の中に入れなければ、僕はこれからあと 124 年の亜寒帯における十勝の次なる経営というのが非常に厳しいものがあるんだから、僕らは、この亜寒帯に住んでいる十勝人というものを文化として楽しむ、文化というのは何も難しくないんで、要はその風土に見合った生産、それに左右された生活ぶり、ということが、僕は大事なことではないかと思っています。あえて言えば、先ほど加藤さんのお話の中にも、言葉の外にあったと思うんですけども、僕はもう一つ言いたいことは、テレビ文化をもう我々はやめようよと、テレビを見る生活、テレビゲームを含めてです、そういう、いわゆるバーチャルリアリティ、虚と実が一体となってあるかのようなことを我々の価値判断の基準におくのはやめようじゃないかと、我々自身が生活の中で自然をしっかりと楽しむところからしか、次なる十勝経営はできないんじゃないか、ということ強く思っています。そういった意味でいくと、ロングトレイルというのは色々な意味で示唆に富んでいます。僕はこのロングトレイルということを中心りやることによって、5年ほど前ですか、十勝観光連盟で次なる十勝の観光の戦略は何かと言われた時に、僕は観光という名前をはずすべきだと、ということで、滞在型交流産業という概念を十勝の観光経営の中で出しました。滞在型交流産業の主たる部分を手取り早く言うと、とにかく十勝の風土を楽しむことによって、メジャーな旅行会社を相手にしない、非日常空間をきちっと提供できる、先ほど林君が言ったようなことを、新しい価値観やデザインを入れて、出していけばいいんじゃないかな。そのためにさらに大きくもっていった時にはロングトレイルというものが、今度は人の交わりとして大きく出てくるだろうというふうに思っております。中村さんが言われておりました、四国の八十八カ所巡りというのは、弘法大師の時代から 1,300 年以上の歴史があつて、そういうおもてなしもあり、宗教という概念を形を借りているのか、僕はやったことがないのでわからないですけども、その中に非日常的な空間をきち

っと提供していくということ、そして四国の人たちが、宗教というものも含めて自分たちの生活ぶりに自信を持っているから人をおもてなしすることができるんだということがあったのではないかと思っているものですから、僕ら自身ももう少し十勝の風土に自信を持ちたいし、冬は寒いと文句を言う人はさっさと帯広から出て行ってもいいんじゃないか、十勝は冬は楽しいんだということが言えるような十勝人になるべきじゃないのかな。そしてそのことからようやく十勝の地域経営が地に着いたものになっていくんじゃないか、この 120 何年の中で、一気にここまで開拓の進んだ地域は世界中に無いそうです。これだけの効率性の高い素晴らしい大地を、3,000 平方キロにわたる生産性の高い田畑を作ったのは、我々であり我々の先輩方です。僕らはこれを資本として、次なる 120 年を考える十勝のために第一歩としてロングトレイルを、先ほど言っていました、ボランティアでやるというのは、たぶんいい話ばかりではなく、かなり厳しいものがその裏側には常にあると思います。僕らはその辺のことを踏まえて、来年いきなり立ち上がろうとか、あと 5 年後にこのコースを整備したい、という気持ちはありますけれども、大事なのは十勝 36 万人がどれだけこの地域を愛し、この地域に生きることを、プライドを、誇りをかたちにしておいて、1 億 2,600 万人に我が地域を売るかということが問われているのではないかと考えております。そんなことを含めながら、僕らは今日入会申込書を出しましたけれども、その辺のことを共有できる仲間、解り合える仲間と少しずつしっかりと進んでいきたいと思っておりますので、話は全然違ってしまって申し訳なかったんですけども、このロングトレイルにぜひとも興味を寄せて頂きたいと思っております。時間も押しているようですので、私からの情報提供で自分の思いを述べさせていただいて、話とさせていただきます。どうもありがとうございました。



#### 4. パネルディスカッション

##### ■ 司会

だいぶん時間も押してきましたので、パネルディスカッションというよりはお二人（中村氏、加藤氏）に対する質問と意見交換ということにしたいと思っております。皆さんこの図面が記憶にあるかと思います。十勝地域ルーラルパス構想というものがかつてございました。これは実は「馬の道構想」と当時呼ばれていまして、帯広開発建設部が中心となって15年前に構想を策定いたしました。先ほど中村さんや加藤さんからお話があったんですが、実はこの時の考え方というのが、先ほどご指摘のあったものと全く同じでございまして、例えば新得方面であれば緑のところは林道ですね、水色は河川敷地、茶色は砂利道、ということで、道を建設することなく、要するに工事や何かを行わないで既存の道を連結することによって十勝中を馬が歩ける道を作ろうという構想がございました。十勝全体で構想図面を作ったのがこちらにあるものですが、十勝全部で3千数百キロと当時言われていたんですね、というようなものでございます。今回、これからお話をしていくために、イメージできると思うのは、例えば中札内地域から糠平にかけて、ロングトレイルを考えたらどのような拠点があるのかというものを、ざっと私の方で整理してみました。中札内には皆さんご存じのようにピョウタンの滝があり、宿泊施設等もございましてね。これは八千代牧場ですけれど、八千代牧場の前には岩内仙峡があり、八千代牧場があつてこのような加工体験が出来て宿泊施設もある、ということになります。その下にはレストランやペンション等もございまして。その後新嵐山がありますね、これは芽室町になります。これはもちろん、先程来スキー場の話もありましたが、スキー場の活性化にも寄与することができるのかなど。その後ちょっと飛びましたが、先ほど林さんが清水町が活動されている拠点だと、その後サホロリゾート、サホロリゾートもスキー場を中心としてやられております。その後、ヨークシャーファーム、今日竹田さんもいらしていますが、ヨークシャーファームも様々なことがやれて一大拠点かなど。特に今年、トレイルというかフットパスのようなイベントをやりましたよね。おもしろ探検隊でしたっけ、鉄道跡地を歩く。次にとかちアドベンチャークラブ。これは屈足にあります。そして、然別湖ネイチャークラブ。今日いらしてくれる予定でしたが、時期的に繁忙期でお客さんがどんどん来てるとのことで、急遽来れなくなってしまいました

た。そして、ネイチャーセンターがございます。士幌に行きまして、士幌はヌプカの里がございます。次に糠平湖。糠平湖の手前にはナイタイ牧場もあります。そういう様な各行政施設をネットワークすることができるだろうということです。本当は今日、ひがし大雪ガイドセンターの河田さんも来られる予定でしたが、河田さんから文書を寄せて頂きました。自分たちはもう東大雪ロングトレイルということで、やりたいというふうに言われておりまして、これはご存じのようにアーチ橋なんです、北海道遺産のコンクリートアーチ橋が売りで、現在 2 橋の橋の上を歩けるということで、散策道といいますか、トレイルを設けているということでございました。こんなようなことですね。ルピナスが咲いています。その一部はトロッコに乗って、これは営利活動というふうになっておりますが、商売としてトロッコを運営しているというようなところもございます。廃線跡が今すごくブームなので、これはそこを利用しているということだと思います。東大雪の道の課題というふうに言われていますが、今後の延長等の整備が未定であると、行き止まりであり、糠平から 3 キロ間の往復、旅をする町ではなくて観光用歩道としてしか使われていない、とかですね、体験プログラムでは、線路跡ばかり歩くのは面白くない、とか、様々なことがあるんです。これらに、東大雪なので登山道を入れて、何か出来ないだろうか、というのが河田さんからのご提案でございました。東大雪の登山ということで、なかなか厳しい道で、簡単にはいかないというような話があるんですが、そういうようなものをうまく自然歩道東大雪の道と山岳ロングトレイルを合わせて 100 キロもの壮大な大雪山ロングトレイルが可能となる、とうことで、ぜひともこれをやりたいので、よろしく願いしますということで、河田さんからはご連絡を頂きまして、パワーポイントを作って頂きました。ということで、これは私が代わって情報提供させて頂きました。ということで、だいたい今、十勝の資源でやれそうなことというのが、私どもの方からもお話をざっとさせて頂いたのですが、すっかり十勝をご存じのお二人なんです、この辺でどういうことができるのか、これからどうしたらいいのかということについて、質疑応答をしたいと思います。宜しくお願い致します。

まずひとつ、これから我々の展開としてですが、先ほどお手元にロングトレイル製作の案内文書、参加しましょうという呼びかけをさせて頂きました。興味のある方はぜひとも登録して頂きたいと思います。実は今、北海道中のこういう活動をしている情報を集めて、12 月か 1 月に札幌地域で全道ネットのロン

グトレイルのシンポジウムを開きたいというふうに考えております。そういうご案内ですとか情報提供等もできるかなと。

中村さん、いかがですか、今日ここで話して頂いて。先ほどの林さんのお話もなかなか素晴らしい絵だったと思うんですが、十勝で行う可能性というんでしょうか、期待するものをお聞かせください。

(中村氏)

直接ロングトレイルとは繋がらないかと思うんですけれども、いつも北海道に来て思うのは、僕らは北海道というのはアウトドアランドというイメージがすごくあるんですが、そういう気が、北海道に来ると急になくなっちゃうんですね。例えば帯広空港に来てそんなことは何も書いてないし、新千歳の空港に行っても、アウトドアに来た、というものが何もないんですね。白い恋人は消えたようですが、そういうものしか目に付かないわけでしょ、だからいわゆる北海道の人が思っているものと、我々本州の方から来る者との温度差があるんじゃないかという気がすごくしますね。今の色々聞いていても、この人は納得するけど、よそからきたらよくわからないと思います。つまりわかりやすさというのが僕は大事だと思うんですね。だから、北海道でわかりやすいのは、やはりぐるっとまわったら一周だよ、というのが一番わかりやすいですよ。アパラチアン・トレイルがどうしてわかりやすかったかといえば、3,500km 一直線、だからわかりやすい。こういうようなものが実はいるんですね。どうも地域に行くと、自分のところ自分のところ、と言うから俺も俺も、となって、大変になってしまうんですよ。あとは、利用者のことを考えないことになりがちなので、わかりやすさというものを前面に出して頂きたいなと思います。

(司会)

例えば、北海道・十勝でそういうことをやるとすると、広さが逆にネックになる場合もありますよね。例えば20キロ何もない、とか、そういう情報提供というのは何か考える方法があるのかなと思うんですけれども。

(中村氏)

その前に大事なのは、どういう人に来て欲しいかという、ある程度の想定があると思うんですよ。アパラチアン・トレイルだったらだいたいこういう人か

な、というだいたいのプロフィールがわかるわけですよ。それがたぶんないと思うんです。四国巡礼だったらだいたいこんな感じかな、とわかるんですね。ところが、北海道にどんな人に来て欲しいか。誰でもいいというからややこしいんですよ。やっぱりこういう人に来て欲しいというある程度のそれなりのターゲットを明快にした、プロフィールをしっかりと分析して、こういう人に来て欲しいんだ、というものがなければ。レストランだって蕎麦がいいのか洋食がいいのかで違うじゃないですか。その辺のことをまず整理をしておかれる必要があるんじゃないかという気がします。

(司会)

竹田さん、毎日お客さんと接して、こういうような構想があったらどういうお客さんが来そうですか。

(竹田氏)

歩くといっても、イギリスのことしか知らないのでフットパスというのが、都会の人が田舎に行く動機が一番、何のために田舎に行くかといったらそれなんだけど、それはロングトレイルだけじゃなくて、一日だけぐるっとまわるとか、というのも想定するし、でも今の話はおそらく一挙に長いコースでロングトレイルという話だと思うんですよ。なんとなく日本人は百名山というネーミングとかそういうターゲットを作ると周る、そして大雪山ロングトレイルという名前を付ければそういう人たちが来る。だからもう割りと歩くのが本当に目的の人たちをターゲットにしたというのが今の話かなと思うんですけども、整理しないでごちゃごちゃにして話すと、見えない世界になっていくなと思います。

(司会)

加藤さん、いかがでしょうか。

(加藤氏)

そうですね。私自身はバックパッカーと自称してまして、長い、短いに限らず、とにかく素晴らしい自然の中に入るのが好きで色々なところを歩いているんですけども、実は、先ほど山田さんの方から話がありましたけれども、

ホースバックライディングもやっているんですね。毎年、この7、8年ほど、先ほどジョン・ミューア・トレイルの話をしましたけれども、シェラネバダの山脈の山麓に、16のパッカーズ、日本語でどう訳していいかわからないんですが、山田さんがやっていたらっしゃるような業者があるんですね。アメリカという国は馬の文化を持っている国ですよ。馬で開発している国ですから、それがアメリカ中にあるんですけれども、その中でも特に西部開拓の最後の拠点であったシェラネバダ、もともとカウボーイだった人たちがカウボーイで食べられなくなって、観光でなんとかしようということで出来たのがパッカーズなんですけれども、実は私、すごいことをやっているんです。シェラネバダだけで、馬でほぼ800キロくらい歩いています。例えばさすがに340キロを一回で、ジョン・ミューア・トレイルを一気にはないですけれども、150キロ、それから80キロ、毎年そんな距離を歩いています。それも4,000メートル級のすごい山岳エリアを歩いているんですね。日本で色々と馬で観光業をやっている方々がたくさんいらっしゃいますけれども、まずひとつは非常に日本人が見たら危険です。本当にものすごい急な坂、岩場を馬で登って行って、急なところを、例えば去年4,000メートルのフォーレスター・パスを越えてきたのですけれども、一挙に700メートルの壁にスイッチバックを作っているんですよ。それを馬で越えるんですね。馬というのは首が長いですから、こう曲がる時に乗っている自分も崖の外を見るんですね。馬もおびえているんです。それが分かるんですけれども、そんなことを平気でやらせるんですね。そこまでは難しいかもしれないですけれども、それこそ東大雪も、山を含めたトレイルと考えた時に、北海道も馬の国じゃないかと思うと、馬でロングトレイル、先ほどお話をしましたように、長ければ長いほど興味を持つ人が出てくるんです。一気に歩くということは、まず誰にでも出来ることではないんですね。アメリカ人であっても6ヶ月休みを取れる人はそうたくさんいないですから、たまたま大学を卒業して就職するまでの間の時間であるとか、会社をクビになって次の会社が見つかるまで来たとか、そういう人たちが多いんですけれども、一気にじゃなくてもいいんですよ。例えば実は去年、3,500キロを30年かけてやった人がいるんですね。50歳の時に全部歩こうと企画を立てて、一気は無理だから30年かけてやろうと、50歳から始めて80歳になって達成したんですよ。この達成感というのは、一気に歩くよりもまだはるかにあるんですね。この感動というのは。これはいかにすごいことかという、3,500キロを30年かけて歩いても、1年間150キロず

つ歩かないと達成できない。でもこれをやることによって、ものすごい達成感があるんです。ロングトレイルを作ることによって、一気に歩こうとする若者の楽しみ方もある、何年にも分けてやろうとする人たちの楽しみ方もある。長ければ長いほど達成感も大きくなるし、それに興味をもつ人が増えてくるんじゃないかと思います。それを歩くのと、北海道だったらやっぱり馬は考えたらよいかと思いますね。実はアパラチアン・トレイルは馬を禁止しているんです。世界一長いフットトレイルという言い方をするんですね。ジョン・ミューア・トレイルは馬を認めているんです。ただ賛否両論があって、国立公園局とか反対しているところもあるんですね。でもつまり、あそこもけっこう爪でひっかいたようなところがあるんですけれども、そこを馬が歩くと、路傍の草花あたりを食べながら行くんですよ。馬は道草を食いながら歩きますから。それからやたらにおしっこを人の30倍くらいしますし、ウンコもしますし、そこをバックパッカーが歩くときに、やっぱりええっと思う人もいるんですね。僕は自然を傷めるということはちょっと問題は確かにあるんですけれども、これはアメリカの文化だからしょうがないな、と思って見えています。その辺も色々考えながら馬とフットと両方歩ける、あるいは馬しか歩いちゃ行けない、あるいは人しか歩いちゃいけない、を含めて、色々考えはあるかなと思います。

(中村氏)

今、加藤さんからお話あったんですけれども、僕らが今勧めているロングトレイルというのは、一気にやることを全然想定していないんです。今年は2日でもいい。翌年5日でもいいんです。そういうことで順番に足していけばいいよね、ということなんです。ただ、加藤さんの話も僕のした話もそうなんですけれども、実は日本とアメリカとを比較してもどこかにしょうがないところが出てくる。ライフスタイルが全然違うし、そのまま持ってきてもなかなか難しいと僕は思っています。そういう意味で日本人に合うようなスタンダードを作っていかなければならないという気がしています。ただ、実は潜在的ニーズとして、マウンテンバイクの協会なんかはですね、僕のやっている構想に非常に興味を持ってぜひ走らせてくれと言ってくるんですね。あるいは白馬もそうでしょうけど、トレイルランニングが今流行ってきているんですね。トレラン、いわゆる山を走る競技です。そういう人たちもぜひ走らせてくれというのがけっこう多いんですね。それをどういうふうにしていくか。ジョン・ミューア・

トレイルやアパラチアン・トレイルのようなところが日本にあれば、そういうところはかなり規制してやらなければならないと思うんだけど、今回の十勝とか北海道のトレイルというのは、そういうところよりも既存の道をうまく使いましょうということだから、かなり制限は解除されるだろうと思います。だからその辺も含めて、もう少し、何を申し上げているかというのは、ロングトレイルを作るというのは、日本のアウトドアズの人をもっと増やそうというのがベースなんです。アメリカのトレイルというのは、今ある人に歩いてもらうわけですから、そういう努力をしなくていいんですね。マーケットというか人数がいるから。でも日本は残念ながらそれが非常に脆弱になってきているんですよ。でもやっぱり自然は大事だし、環境問題を解ろうとしたら自然の中に入ってもらわないと困るというのがベースにあるので、子供たちの教育もありますから、そういう意味で、今我々がトレイルをやろうとしているのは、そういう人たちに参加してもらおう、底上げをやろうということなんです。だからその辺を間違ってしまうと違うかなと思います。

(加藤氏)

まさに中村さんがおっしゃったことはその通りで、私が自然というものを考える時に、本来、人間というのは自然人だと、そして文明ができてきて、例えば東京なんかはまさにそうですね。一生東京の中で、自然に全く接しなくて生きていける時代になってしまったんですね。科学や技術が発達してこういう時代になってから。それ以前は、人は自然がなかったら絶対に生きていけなかったんですよ。原始に帰るということじゃないんだけど、自然に接しなくても生きていける時代であるからこそ、自然のことをもっと知る必要がある。そして、温暖化がどうのと頭で色々考えて今やっていますけど、自然のことを知っていると、もっとその深刻さが分かってくる。そういう意味で、本来人間は自然人だと、その基本として、本来人間はみんな歩いていたんだ、ということがあるんですね。

(司会)

話せば話すほど要素が多いですね。ロングトレイルという言葉の中に教育の話があったり、ライフスタイルの話があったり、そういうものも含めて文化というものもあるでしょうし、北海道だったら開拓の文化とか、農耕文化とか、

そういうようなこともあるでしょう。しかし、これは拠点拠点がそれを活用しながら生活できるような体制をとらないと維持もできないわけですから、何かその辺でうまい仕組みづくりというのを考えていこうか、というのが、今回我々が考えていきたいロングトレイルの検討委員会の検討の中身になるかなと思います。

(中村氏)

もう一度申し上げますと、北海道というのは観光で行く時は、美瑛のパッチワークの丘、なんとかの温泉、それから白い恋人、というふうに決まっている、実は歩きたい人はいっぱいいるんだけど、どこを歩いていいかわからないというのが大半なんです。実はこれがものすごい大きな欠陥で、こっちにいる人はどこでも歩けばいいじゃないかと言うわけですよ。僕は釣りが好きなので、いつも釣りの道具を持ってくるんですが、どこで釣ったらいいかと聞くんです。みんなその辺で釣れるよ、としか言わない。それじゃ困るわけですよ。どこへ行ってくれ、と、ところがアクセスがまったくないわけですよ。日本の釣り人口は1,200万人いるんですよ。北海道で鮭を釣りたいと思っているんだけど、どこへ行ったらいいかわからないし、何もありません。色々調べて行けばありますよ。しかしそれは普通の人に優しくありません。そういうインフォメーションを探すのが大変。つまりその辺の温度差がすごくあるので、もっとわかりやすくするというのが入り口としてすごく大事なかなと思います。

(司会)

中村さんが会をやられている、東京アウトドアフェスティバルに我々の会で今年中村さんのおかげでお安く出せたんですけれども、出させて頂いて、十勝に来てどんなアウトドアをやりたいですか、と聞いたら、一番がウォーキングと書いているんです。本当に今日のテーマに合うように、十勝に来て歩きたいと言うんですけれども、僕らはピンときませんよね。十勝に来て歩きたいって何のこと？という。それこそ今の話だと思います。どこにどうやって、誰に教えてもらったら歩けるんですか、どこを歩いたらいいんですか、結局僕らはなにもそういうツールを持っていないということに気が付いたということがあって、ですからそういうようなものをうまくやるために、先ほど拠点があったんですが、拠点も実はけっこう充実してきているんです。そういうものをうま



く連結したいなと思うんですが。

(加藤氏)

まさにそうですね。拠点というのは本当に重要なんです。拠点がなくて、本当にエキスパートの人たちはやりますけれども、むしろ拠点なんかない方がいいという人たちもいるんですから、でも一般の人たちにやって頂きたいと思ったときに、やっぱり拠点があることがものすごく重要な要素です。そういう意味では、けっこうあるな、というふうに思いましたね。それともうひとつ、今、トレイルランニングがブームなんです。これは地元の人にとってはとても魅力的なんです。例えばハイキングをやろうというイベントをやりますと、50人しか集まらないんですよ。トレイルランニングをやろうと言いましたら、500人、1,000人集まります。ですから、トレイルを持っているエリアの人たちがイベントをやろうとしたときに、トレイルランニングに気が付くんです。それからアウトドアメーカーがこぞってトレイルランニングを走っています。カタログを見ると、前はハイカーの写真ばかりだったんですが、2~3年前からトレイルランニングの写真ばかりなんです。それだけのもも売れるんです。例えば信越トレイルは、トレイルランニングで競争なんです。爪でひっかいたトレイルですよ、そういうところに、競争で500人走ったらどうなりますか。実はオファーがあるんですが、それを考えて、信越トレイルに関してはノーにしたんですけれども、例えば十勝みたいなこういう広大なところであれば、トレイルランニングが可能だと思います。もうひとつ、実は僕はある意味で悪者になりかけているのですが、トレイルランニングがなぜ増えているかということ、トレイルランニングはもともと自然が好きな人たちが自然の中なんです。そうじゃなくてこんなに増えているのは、シティランナーがこんな自然の中を走れるんだ、自然のことを知らない人、自然への意識が低い人がけっこう入ってきているんです。そうすると色々なかたちで問題になっているんです。その辺の意識を上げる必要があるなと思って、僕は色々なところで発言したり書いたりしているので、トレイルランナーにとって僕は敵なんです。でも今すごく重要な時なんですけれども、そういうことも含めて、トレイルランニングも考えた方がいいと思います。

(司会)

トレイルランニングねえ。ランニングだけでも大変なのに、どうしてトレイルするかな、という気もしますけれども。

(加藤氏)

アメリカは3,600万人もいるんですよ。日本も今右肩上がりです。要はマラソンの場所が自然版です。問題は、昔は登山をやる人は、未踏峰を我も我と争って登っていたんです。これはアスリートだったんですね。今は90%がのんびり歩こうというお年寄りです。アスリートじゃないんです。僕自身アスリート感覚をものすごい持っていた、オリンピックが大好きだし、サッカーも大好きだし、熱くなっちゃう方なんですけど、山を歩くときは、アスリート感覚では全くないんです。今歩いている人たちは、アスリートじゃないんですね。そこに、競争しようという人はアスリートなんですよ。今までアスリートじゃない人たちが独占していたんですね。そこにアスリートが入ってくることによって、追いつく訳にはいなくなっているの、いかに共生するか。ひとつのトレイルを両方でうまく利用できるかということを考えなければならない時代だったのに、そういうふうになっているのに、アドベンチャーレースマガジンとかっていう雑誌が出ているんですけども、この5年間ページをめくっても、ひとつもそういうテーマで書いている雑誌がなかったんです。それで、アドベンチャースポーツマガジンに先月書いたんですね。それがけっこう反響があって、走っている人はそんな観点からものを見なきゃいけないんだ、自然のことを今まで考えもしなかった、という人たちが考えてくれるきっかけになった。そういう発信をどんどんしていくと、自然が好きじゃなかった人、知らなかった人も知ってくれる、喜んでくれる、ということがあると思うんですよ。それが立ち上げる側、管理する側の踏まえるべき点かと思います。

(司会)

そろそろ時間にもなろうかと思うんですが、今回の共催の一人でございます、十勝アウトドアネットワークの鈴木さん、今のお話をふまえて何かひとこと。

(鈴木氏)

ご苦労様でございます。色々十勝に関しての話が出ましたけれども、いずれにしても十勝のロケーション、もちろん百数十年前には一面カシワの原始林だ

ったというところですが、百数十年でこれだけのところにした人間のパワーってすごいな、ということ最近特に思うんですけれども。いずれにしても我々が今持っている資産をどうやって使っていくかということが非常に大切な時代に入ってきたんだろうと思いますし、既存の見る観光からどんどん体験する観光へとシフトをしてきている面と、このロングトレイルというのは非常に我々としてはきちんと取り組んでみたいツールだというふうに思います。先ほども菊池さんの方からお話がありましたように、ぜひ参加の申し込みをして頂いて、私どもと一緒にこのロングトレイル構想で夢を膨らませて頂けたらありがたいなと思います。よろしくお願い致します。

(司会)

ということで、これから、今日内諾をもらっているいくつかの拠点の方々の皆さんと勉強会を進めていきたいと思っております。みなさんぜひともお手元にある参加しましょうというような紙に連絡先をお書きください。連絡は随時お送りしたいと思います。ではこれで今日の「第1回十勝を楽しむ「癒しの道」ロングトレイルシンポジウム」を終了したいと思います。どうもありがとうございました。